

大正十三年十月三日發行

樓

神

對

中

大正十三年十一月一日發行

棲神

目次

卷頭言……………	一	復興……………	吉川啓善…三五
祖書感讀隨筆……………	台水日治…三	燒野が原……………	泰觀行…三六
日蓮上人門葉之管見……………	太田純志…六	御山の曉……………	渡邊智榮…三七
念佛思想史に對する余の管見……………	福島瑞岳…九	偶感……………	S K 生…三八
立正安國論讀後の所感……………	靜溟生…一三	涙……………	深敬道人…三九
吾が崇拜せる大聖人……………	吉田曙人…一五	靜寂を破る響……………	吉益正光…四〇
如何にして人心を統一し國民精神作興の實を擧ぐべき乎……………	古董每水…一七	我が書齋……………	二宮龍巖…四一
科學は果して宗教を葬むる乎……………	富田海音…二一	凝視……………	今泉智旭…四一
文化說……………	靜溟生…二四	お山の夕景……………	寒川生…四三
支那回教徒の運命觀……………	大峰龍正…二五	予の幼かりし時……………	S Y 生…四四
四顧寂寞……………	三基生…二六	追憶……………	覺林道人…四五
思ひ出の記……………	鳥海山人…二七	傳説を語る漁夫……………	長倉唯嘉…四六
人生の富……………	長瀬龍光…二九	民謠二篇……………	平地幽嶺…五三
雜想三篇……………	靜溟生…三三	小培はれたる小百合……………	丸山其撰…五五
芬陀利の峯……………	H M 生…三四	夢……………	重松ひさし…五八
		殘骸……………	寬明庵…六一

聖丘を望みて	高山しのぶ	六五
編輯の後に	羽水	生六五
春期旅行記	吉川啓善	六八
同窓會記事		七三
辯論部より	江原	生七五
文學部より	松村	生七七
運動部より	靈峰	生七八
會計部より	神田	生八〇

卷 頭 言

「八萬四千の法藏は我身一人の日記文書なり」とは、宗祖大師が、學問修行の根本方針を、我等に示し給へる言である、即ち我等が修むる科學、哲學は、科學の爲の科學哲學の爲の哲學ではない、开は自己完成の爲の間接的階段であり、由序である、諸他の文藝も美術も皆同様である。若し然らずとせば、此等は唯だ單の遊戯に過ぎぬ、其處には全く學問の意義も無く、文藝美術の眞の價値も無い。

爰に自己完成とは、第一義的の大人格の築成を意味する、即ち絶對本佛を自身に見出すことであり、永遠無窮の生命を獲得することであり、人生の眞價値を確認することであり、更に全宇宙を眞善美化することである。併し是れは「無而欲有」底の者でなく、全く還元的、本有的のもので、教學上の術語では之を始覺即本覺と稱する。

南無妙法蓮華經とは、この自身に見出す處の絶待本佛の御名である、即ち我等が自己完成の直接的方法としての、信念涵養と行道策進とは、唯此本佛の御名たる南無妙法蓮華經を、心に念し口に唱へ身に行ふの一事に在るのである。外觀には、他佛他法に歸依渴仰するが如くなるも、开は修養の初歩に於ける傾向であつて實には自己の本佛を自ら喚び活す所の不可思議の修行法である、「多寶如來の寶塔を供養し給ふかと思へば、左に非ず、吾身を供養するなり」の聖訓は此意に外ならぬ。

所有學問藝術は本佛への間接的道程であり、信念涵養と人格向上とは本佛への直接的階段であらねばならぬ、即ち一切を擧げて南無妙法蓮華經に歸納すべきである、否、深く之を考ふる時は、凡百の云爲行動は、悉く本佛に出發し、本佛に安住し、本佛に歸着する、即ち始中終を通じて、唯だ南無妙法蓮華經である。

若し本佛と云へる中心を失ひ、此に統一せぬならば、必ずや修養も淺薄に流れ、信念も迷妄に墮するであらう、又凡ての學問、藝術も、唯だ一種の骨董で、管に力ある心の糧とならぬのみならず、却て心を傷ぶり

身を亡ぼすの苦具となるであらう。「智者學匠の身となりても、地獄に墮ちて何の詮か有らん」と云ひ、「佛法を學ぶ者却て多く地獄に墮つ」と云へる聖誠は正しく此に在るのである。

學問と宗教とは別個の世界であり、藝術と道德とは各独自の境域を有す、とは、常に聞く處であるが、是の如きは、實に無宗教を以て誇りとし、自己完成に盲目なる、智識偏重、藝術至上を夢みる者の囃語である、此囃語が一段嵩じたのが、某々文士の情死であり、某々博士の獸行ではないか、即ち學問墮獄、藝術亡國を絶叫するの必要がある。

從令學問は宗教に歸趨すべきもの、藝術は道德と一致すべきものと合點しても、其宗教や道德の内容實質が、低級で不完全で、第二次的のものならば是れ亦前者と五十歩百歩である。仍て我等の要求する所は、本佛中心の宗教信仰、之を基礎とせる道德、即ち自己完成に取りて最も力ある所のそれではなくてはならない。

我等は自己完成の爲めに、科學哲學の研究にも、文藝美術の修得にも、努力せねばならぬ、又本佛顯發の爲めに、より高き人格の向上と、より正しき信念の増進に奮勵せねばならぬ、其れが立正大師の門下として、身延在住の學徒としての天分である。(十三年六月念一日)



祖書感讀隨筆

台 水 日 治

○經濟思想、聖祖の透徹せる大智、絶倫の勇氣、無限の慈仁、を備へ給へる中、所信に向て邁往躍進、獅子奮迅、千難萬苦を意とせざる、大勇猛の精氣と行動とは、千歳の下、尙ほ懦夫をして起たしむるに足る、此勇氣や、實に苦樂を解脱し、利害を超越す、全く些の打算を容れざるなり。斯る超打算的なる大勇、放膽の半面に、亦た極めて細心の考慮と。周到の注意を怠らざるものあり、偉人の心境、洵に凡情の窺知を許さざるなり。今且く其の人間味の豊なる、打算的經濟思想如何を窺ふべき聖語の一二を摘示す、曰く

殊に三十日餘りありて、内心に法華經を信し、日蓮を供養し給ふ事、いかなる事のよしなるや(中略)ことに五月の頃なれば米も乏しかるらん日蓮を内々に育くみ給ひしことは日蓮が父母の伊豆の伊東川奈と云どころに生れかわり給ふか。(四一二頁、船守書)

此入道、佐渡國へ御供爲すべき由、之を承り申す、然れども用途(用度に同し、費用、又は旅費なり)と云ひ、かたがた煩あるの故に之を還へす、御志始めて申すに及はず候。(七〇〇頁、寺泊書取意)

富人なくして五穀乏し、商人なくして人集まる事なし、七月などは、鹽一升を錢百、鹽五合を麥一斗に換へ候へしが、今は全體鹽無し、何を以てか買べき。等云云。(一七九三頁、上野書)

第一文は、伊東配流の時、粗岩に救はれ、月餘を内々に供養せられし、船守彌三郎に對する感謝の念の筆端に溢れたるは勿論、殊に僻地にして而も梅雨期、其貯藏の米穀等の乏少を推量して、感恩の情の彌々深きを看る、と同時に其經濟的思想の閃きを見るべし」第二文は佐渡遠島の節、下總富木殿よりの篤志にて、一人の

入道を御供に付け、道中は勿論、佐渡までも同伴守護せしめんことを、越後寺泊の津にて之を謝り還へす時の、富木殿への文通の一節なり。其謝絶の理由には、言外の深意もあらん歟なれども、文面儘かに懷中打算の人間味を看取せざるを得ざるなり。第三文は身延御入山第五年の九月、駿河上野殿への返書の一節。僻陬の山中、殊に五六月の霖雨を経て、如何に物價の騰貴、物資の缺乏に苦み給ひしかを知ると俱に、全く算數を度外視せざりしを窺ふべきなり。」

○滑稽趣味、師嚴道尊の古語に洩れず聖祖の居常謹嚴自ら持すると俱に、門弟檀越に對する嚴格さは、想像に難からざるなり、彼の三位房が京都遊學の砌、法門の爲とは云へ、權門高貴に出入せし其卑屈と、縦まに實名を改めし其輕卒とを痛く詰責し給ひ、又其語調の如きも必定京訛りになりたるべしとて、少輔房の例を擧げて嚴誠し給ひしが如き。又身延在山中、駿州内房の老尼、山河の險阻を杖に扶けられ、遠く聖祖を訪問せしに、氏神參拜の序とありしかば、神を主とし、佛を徒とすること、佛門の精神に背けりとて、遂に面會を許さず、涙を揮つて、門外より逐還へしたるが如き、皆其例なり、何に況んや、教義の批判、信仰安心の問題に關しては、一步も假借し給はざりし事、固より言を俟たざる所なるをや。斯の如く謹嚴侵すべからざる性行の内面に、温潤玉の如き慈愛の情有し給ひしこと、是亦た遺文に徴し吾人の瞻仰措かざる所なりと雖ども、更に他面滑稽、洒脫の風格を具へ給ひし事を看過する者、蓋し尠からざるべし、今試みに遺文中より其一二を摘録せん。

いゝの芋一駄、牛蒡一つと、大根六本、いもは石の如し、ごぼうは大牛の角の如し、大根は大佛堂の大釘の如し、味は初利天の甘露のごとし。(二〇七一頁、上野書)

是れ、上野殿より、芋、牛蒡等の蔬菜を獻せるを謝し給へるもの、譬へ得て巧妙なるは勿論、更に滑稽味の豊なるを覺う。此外「滿月の如くなる餅、油のやうなる酒」の如き、遺文諸處に散見する所なり、又

白小袖一つ、綿十兩、慥に給ひ候ひ畢ぬ、歳も傾き候、又處は山の中、風はげしく、庵室は籠の目の如し、打敷くものは草の葉、着たる物は紙衣、身の冷る事は石の如し、食物は水の如くに候へば、此の御小袖給

び候て頓て身を暖まらんと思へども、明年の一日と書かれて候へば、迦葉尊者の鷄足山にこもりて、慈尊の出世五十六億七千万歳を待たるゝも斯くや久しかるらん等云云(二〇一一、四條金吾書)

此書は弘安三年極月十六日、鎌倉なる四條氏よりの供養に對する謝狀なり、前半は身延西谷嚴冬の生活、衣食住俱に匱疎窮乏にして、寒苦の堪へ難きを形容し、後半は直に此供養の小袖を着せんとの心切なるも、四條氏の添狀に「明春元旦御着用有之度」との言ありし歟の故に、寒風に身を縮めながらも、忍びて、來る元旦を待たざるを得ず、元旦までは茲僅かに二週日なるも、开を待つ心は、一日千秋も當ならず、彼の迦葉の鷄足山に入定して、常來彌勒の出世成道の曉を待つ心も、恐らくは斯の如くならんと。小袖着用の小事を龍華成道の大事に比し、半月の短時を五十六億の長時に類したる處に、一讀無量の滑稽趣味を感得すると共に悠揚迫らざる聖者の風懷を仰ぐべきなり。

○護法精神、聖祖一代不惜身命の弘通は、要するに、續種護法の大精神の發露に外ならずと雖ども、今は但た一小範圍に於て其護法心の閃影を看んとす、藏書の保護即是れなり。

又貴邊に申付し一切經の要文、智論の要文五帖、一處に可被_レ收集_ル候、其外、論釋の要文散在あるへからず候。(七〇三頁、富木入道殿御返事)。

斯の聖牘は、文永八年十一月、佐渡塚原より遙かに富木殿に賜はりしもの、一齣なり、曾て大藏閱覽の際輯錄せられし經論の要文、其他隨時筆錄の要書等をば、之を整頓保護すべく、鎌倉發足、匆忙の際、富木殿に委囑する所ありしも、猶ほ安心なり難くて、斯く再び嚴重の注意を與へられしものなり。風雷叱咤、破邪顯正に餘念なく、人類救濟、佛土實現に驀進せし、偉聖の腦裏に、此の如き微細の注意力を有せられし事は、實に鮮すべからざるに似たりと雖とも併し教學の根據は正しく經論疏釋に在るを思はば、半卷一冊の典籍も全く金石なり、破邪顯正の大光明亦た此より發すと云ふも敢て過言にあらじ、是れ聖祖の藏書愛護を以て護法精神の發露と爲す所以なり。因て惟ふ、聖祖御遺文中、眞蹟の現存せるは全體の約四分の一(遺文錄所載三百八十六通、其中眞蹟所在判明一百餘)中に於て正中山の所藏に係る者四十五六通、殊に安國論、本尊、取要、曾谷、治病、四信五品鈔等

最重要の諸書、皆其中に在り、此の如く多數の聖教、中山の寶庫に儼存し得たるは種々の理由あるべしと雖も主として開基富木氏の篤實にして謹嚴なる、能く前掲の如き聖祖の嚴誠を恪守し、延いて眞蹟聖教の整束保存に留意し、範を後昆に垂れたる結果ならずんばならず、嗚呼、聖祖護法精神の感化、深くして且遠し、仰がざるべけんや。(大正十三年六月下浣)



日蓮聖人門葉之管見 (前承)

太 田 純 志

△聖誕四十二年弘長三年

叡尊(南都西大寺)十重禁戒具足戒

◎ 良觀 諡號恐性菩薩又云兩火房廣律及眞言宗也

靈鷲山感應院極樂寺住建保五年七月十六日大和國磯島生嘉元々年七月二十一日八十七歲寂

△聖誕四十三年文永元年

◎ 東條景信 前述

—貫名次郎重忠

◎ 男金藤三(又四)郎信實、法名妙信——彌四郎(横死) 文永十一年六月八日

◎ 光日尼妙向房芴天津住

◎ 日向上人 民部阿闍梨又佐渡公建長五年四月二十八日生延山第二祖延和三年九月三日年六十一歲死

◎ 工藤吉隆 前述

◎鏡忍房日曉、乘觀、長英、等傳不詳

◎北浦忠吾——東條濱荻任人工藤氏家人也

北浦忠内

△聖誕四十四年文永二年

◎妙金 下野國宇都宮君島氏祖母也

◎妙正 宇都宮下野守景綱姉也

◎佐久間兵庫亮重時——上總夷隅郡植野郷澳津領主

——十郎左衛門尉重貞——

平次郎左衛門重則……日承(誕生寺第五代)

◎日保 幼名長壽曆師房又美作阿闍梨曆應三年四月十二日八十三歲寂 弟子日澄、日明、日惠、日承、日

靜等

◎寂日房日家 幼名竹壽曆或云經壽曆正和四年七月十日五十八歲寂

兩師携手小奏誕生寺並澳津妙覺寺建立

△聖誕四十五年文永三年

◎三位(房、又)叡山遊學京都弘通、人後年於鎌倉龍象房間答對決、人 是一人說

◎三位公(前同人)龍口法難時十三歲朗師共入籠後身延第三世トナル

三位房 准長老弘安二年死 是二人說也

△聖誕四十六年文永四年

◎星名五郎 佐久間氏家僕傳不詳

◎高橋五郎時光(忠)——上總竺森墨田住庭谷山妙福寺者跡也

◎日秀 從後醍醐帝賜常在院建武元年正月十日七十歲逝去

◎齋藤遠江守兼綱 上州藻原郷住、出家常在院日朝 弘安十年三月二十二日寂 妙光寺妙興寺建立

◎曾谷四郎左衛門直秀 法名道崇 長崇山妙興寺建造

伊豫守橘定時

妻(富木氏再嫁)

◎伊豫阿闍梨日頂 號本國院十六歲投建長四年生文保元年三月八日寂(或云八月十六日或云正和五年三月

八日)六十六歲也(或云六十五歲或云七十七歲)

真間山弘法寺第一世

◎法鑑房 云平左衛門尉入道盛時平三郎左衛門尉賴綱之父也云云 此說不審

◎千葉氏 下州古河邑主也 傳未詳

◎日胤 千葉氏子法興山妙光寺開基正應元年正月一日寂(或德治元年四月六日化)

△聖誕四十七年文永五年

平重時裔

◎平左衛門尉三郎賴綱 入道果圓 宗綱(佐渡並上總下罪)資宗(飯沼判官安房守)二子有、永仁元年四

月二十二日賴綱資宗被誅 鶴岡學頭安樂房盛辨(隆辨高弟)賴綱叔父也

小野源藏人太郎時村

時政

時定 彌源太兵衛尉

◎北條彌源太入道 統紀云掃部頭時盛或說平六左衛門尉時定云云此二說難信 傳不詳更考

少補房

◎能登房 途中退轉返逆者也傳不詳(續出)



念佛思想史に對する余の管見（承前）

四、日本念佛思想義

福 島 瑞 岳

予は今日日本佛教史上に於ける念佛思想の義を論ずるに當りお斷りをせねばならぬ事は、支那念佛思想の系統中有名な三種の系統を秩序的に擧げざりし事を實に遺憾に堪へない、勿論それは、支那佛教史の講座に依つて更に考慮を深からしめたのである、支那念佛思想を論究せんとするに此の系統を脱せば殆んど其價値を認むる事は出來得ない、然し別條せないが三系統中慈愍流を除く外列記したのである、予は此の系統に依つたのは親鸞上人が念佛系統の最も深い人物をゑりぬいて七高祖とされたのに順じたのであつた。

一般的に云ふ支那念佛思想中心としての三系統は即ち、一は惠遠流、二は慈愍流、三は善導流である、惠遠流は前述の如く、惠遠大師が、東林寺に於て百八十人の同衆と共に盛んに念佛を唱へたと傳へられてゐる是れが即ち觀念々佛とて唯に佛名を稱するのみならず心に佛を觀じ身に禮拜すると云ふ所謂三業相應の念佛と云ふのであらう。

次に慈愍流の念佛なるが唐の初めに印度に流學して慈愍三藏より初めしと云ふも其性質は極めて不明了なりと云ふ、然し其著述に往生淨土集なるものありと云ふが後世一向傳らず故に不明なものである。予思ふに親鸞上人が七高祖中に列記せないのは、其明了を缺いてゐるのと教義の内容等が適確ならざりし爲めであらう。要するに以上の二流は後世に大影響を及ぼさないのみならず慈愍流の如きは形式あるのみである故念佛の歴史上甚しき重要なものではない。

次に善導流は是れも前述の如く曇鸞、道綽を経て善導に來たもので先師の教義を受け有名なる觀無量壽經の疏を著して初めて口稱念佛の意義を大成されしものである。今支那念佛思想上注意すべき問題は往生に於ける二様の意義の存する事である、然かも學者は久しく之を論議し研究し來たのである、即ち一は淨土往生で他は兜率往生である、彼は慾界の衆生は罪惡深重なるが故に直に報土に生れて成佛する云ふ事は不可能なりと云ふ、然るに彌勒菩薩の兜率天は同じく慾界なるが故に容易に往生する事を得ず、されど彌勒菩薩は當來成佛の佛なるが故に都率に往生する衆生は此の菩薩の保護の元に修行し彌勒成佛と共に一同成佛すると云ふ信仰が都率往生の中心思想である。

次の淨土往生論は彌陀の佛身に就て化身か報身に從つて西方淨土は化土か報土かの争ひが學者間に研究された、即ち化身化土説に依る時は彌陀と釋尊とは勝劣の差あり、又釋迦佛は非坐同居の穢土に居し、彌陀は化土なるが故に相違あるも、然し化土往生云ふ事は直に成佛を意味せず鈍根の衆生なる故に娑婆世界に於いて多くの誘惑等の爲めに彌陀の淨土往生佛の本に加護されて靜かに修行して成佛する意味が化土往生で是れが彌陀西方往生の化身化土説である、天臺及び嘉祥説は是れに類するものであらう、然し此の方面の學者は別時意趣が兜率往生に對して淨土往生を取るも往生即身成佛は取らない、此れに反する彌陀の報身報土説は、報土に生るゝ事が即ち成佛なるが故に單に兜率往生のみならず絶對に化身化土説に反對するのである、善導が觀經疏等に於いて極力兜率及び化身化土説を斥ふ從つて觀念々佛を否定し佛名を稱するのを最高修行として口稱念佛を大成されたのである。

予今望月博士の説を茲に徴して考察するに、兜率往生思想は最も其根據を有してゐるが、淨土思想説は其根底がない様に思はれる、何んとなれば彌勒當來出現は釋尊が直説と考察してもよい、彌勒が兜率天に住定したのは釋尊の八相成道思想が發達せし後の事であらう。釋尊は嘗て彌勒當來出現説をされしも其彌勒容易に出現しさうもないが故に釋尊が彌勒の假説的のもを直に實現すべく八相成道されたのであると云ふ然らば彌勒の兜率天居住説が確定するに稍近い。

淨土往生思想は其の經路を餘程殊にしてゐる、彌陀の説法聽聞せやうと云ふのは勿論なれど、それは直接の目的でなく、眞の目的は此世界は五濁爛慢の穢土で宛然ら焰々と熾え上る火宅の如く到底安心が出来ないから、斯かる苦憂の地上を脱し早く安樂淨清な淨土に行き靜かに遊戲雜談に耽け様と云ふ思想である、然らば誰が考へても彌勒の方は純粹佛教思想の様に見えるが彌陀の方は幾分婆羅門の形式を帯びてゐる様だと論じてゐる。要するに何れの説にしても確實なる典據なき故に信じ得る事は出来ない、然るに善導大師は是等の兜率雜生思想や化身土説及び觀念々佛思想を悉く排斥して唯彌陀佛を稱名すると云ふのを以て最高修行とした處に彼の特長があるのであらう。法然が初め惠信僧都の往生要集を中心としてゐたが遂にそれを捨て、善導大師の觀經の疏に依つて確實なる標的信仰としたのも此の點であらうと思はれる、殊に彼は撰擇集の中専ら善導師に依りて淨土の宗旨建立する事を宣言し、殊に善導の判釋を規矩とせられてゐるのを見て明らかである。

次に日本佛教史上に於ける念佛思想觀であるが其最初念佛を唱へたのは誰であるかと云ふ事を研究して見ると事實不明である、以來幾多の學者間に於いて説明されてない所を見ると、それが頗る困難な問題の様に思はれるのである。予今考ふるに佛教が本邦へ傳來したのは、欽明天皇の即位十三年十月十三日と云ふ事は一般の知る所である、此の佛教が盛んに弘通する様になつたのは聖德太子に始まる即ち日本佛教の開祖は聖德太子と云ふ事は略信してもよからう。然らば其の佛教が鸚鵡的に宣佛されたのかと云ふに決してさうではない。太子は自身の頭腦に依つて日本國體思想に相調和し而かも純日本的に化して弘通されたのである、然らば太子の佛教觀に於ける根本思想は那邊にあつたかを考慮する必要がある。要するに佛教の宗旨を何れに求めたかと云ふ事に就いて研究せねばならぬ、従つてそれが根本問題であらうと思ふ、若しも太子をして日本佛教の開祖とするならば其の太子の根本思想は那邊に歸旨してゐたかと云ふ事を推定せねばならぬ、是れが基礎的に解決されなかつたならば従つて日本佛教の中心を失ふは當然であらうと思ふ、然るに一般學者界の説論によると太子に宗旨がない、所謂八宗十三宗の開祖であると太子をして無生命者とし乃至甚しきに至

つては引張鮪の様にして各開祖自己の宗旨である祖師であるとしてゐる、それ實に我田引水の極なるものにして又太子の根本意志を知らぬもの、考へであると云つて敢えて過言ではない。

太子の正妃善岐々郎女病床に就き給ふや、諸王子及諸臣大に憂愁し、共に發願して釋迦牟尼佛の像を安置して熱心なる祈禱をされたと云ふのみならず、法華經に就て深き研究なされた邊から見るも法華經中心思想たる事は言は待たない、殊に、資生産業皆與實相違背の根本思想として御用ひになつた事は一般學者の思想上に於いて共通せる太子觀である。

予思ふに、斯く論じ來る時は勿論太子全體意志は純法華經中心主義者である、何んとなれば太子は攝政の位に在り乍ら政務の傍らに官服の上に袈裟をかけられて三經を講述せられた、即ち維摩經は男性的に法華經の精神を現はし、勝鬘經は女性的に法華經の精神を説示された、此の點から見ると結局法華經の精神を粹拔されたのが太子の佛教觀である、故に釋迦牟尼佛中心主義即ち、佛立宗である。今日蓮聖人の御遺文に依り指摘したら更に明了なるものがある。祈禱書九〇八 上宮太子ノ記ニ云ツ 我滅後貳百餘年ニ佛法日本ニ可弘ム云云。傳教大師延曆年中に叡山を立て給ふ桓武天皇は平の都を立て給き太子の記文たがはざる故ニ云云。と佛陀の眞生命が自己貳百年後に必ず内鑑的宣傳される事を豫言し。又本尊抄九四八 一蘭浮提第一ノ本尊可レ立ニ此國ニ月支震旦未^ダ有^ニ本尊。日本國、上宮建^ニ立^ス四天王寺^ヲ未^ダ來^レ時以^ニ彌陀佛他方^一爲^ニ本尊^一云云。我日本國に本化的本尊の建立すべき其の前提として時未だ來らざるが故に迹門の彌陀を以て本尊とするは近き内に傳教大師必ず出現して本門の實義の顯現するものなりと證し。四條書一六三〇 云、御年二歳の二月東に向つて無名の指を開て南無佛と唱へ給へば御舍利掌にあり。云云又中興書一九一八云、同六年に法華經を讀誦し給ふ。それよりこのかた七百餘年王は六十餘代に及ぶまでやうやく佛法ひろまり候て日本六十六箇二ツの島にいたらぬ國もなし云云。等に至つては愈太子の出現は佛陀再誕を表象するの感がある。太子が法華經を中心思想として採用し専ら宣傳されしは佛陀の生命の本質即ち心理的活動を具體的に表現されしものであると云つて敢て過言ではなからう。日蓮聖人は我れは何れの宗旨の開祖にも非らず末葉に非らず釋迦牟尼佛建立し給へる佛立旨

である。主張されてゐる所は太子の佛立旨思想と相一致してゐる様に思はれるのである。次に太子の念佛觀から次第を追ふて論述せ様と思ふが紙數限られてゐるから、更に稿をあらためて述へ様と思ふ。(未完)

(大正十三年、一、廿五)



立正安國論讀後の所感

靜 溟 生

就中日違得生於此土豈不思吾國哉仍造立正安國論云云(六八七)

聖人は常に眼前のみの事柄に囚はれて其れが批判改善を爲さうとせられたのではなく、开を改善せんには須らく先づ其の根源からして改めなければならぬと主張せられた、畢り其の根源と云ふは宗教の信仰の謂にして其の信仰の正邪が所有諸般の現象の上に影響するものであると云ふ固い信念の發露として茲に立正の面目を忌憚なく絶叫せられたのである。

是れ云ふ迄もなく法華經の開顯統一の原理に基く批判眼の光りである、即ち一念三千といふ大調和の宇宙觀人身觀佛陀觀を教へ所有思想を法華經の絶對真理の壺に容れて之を統一しつゝ、一切の思想をして各其の方向を指示して相互の圓融調和の軌道を布き此の深き根底から出發して眞の慈悲眞の報恩の觀念を涌出せしめ、これによつて利害衝突の多き此の現實の社會に一大調和の文化の宮殿を建立せんとする叫びである。

法華經の示す開顯とは即ち開權顯實にして淺薄低級なる思想を矯正して充實深淵高尚の思想を顯現することである。即ち一念三千の絶對真理の高樓に足を止めてこれからして一切の思想批判の觀察眼を放ちて洗鍊し取捨し統一するには必らず足を此處に固く踏み止めねばならぬ、換言すれば妙法蓮華の信念を強く受持せ

ねばならない、聖人は堅くもこの信念に任せられた、否法華經其のものの活現體として既に正を立て、國家永遠の安泰を企圖されたのである、單なる護國を意味せることは大いに違ふのである、故に立正安國論を造ると云はれたのである。

立正安國といふ其の精神は世界地上の各國家に對しても所有國家は正道を基準としなければ永久の發展永久の平和は望めるものではないといふ教である。

國亡びて山河あり大地廣く草木茂り群生其の中に依然として栖息して居つても國家擧げて此の妙法蓮華の眞理に背かば其の國は既に亡びたるも同然である眞理を根底としない國家にはよしや一時の安全を齎らすことはありとも开は永久の安全永遠の平和とはならないのである、然うして是の眞理なるものは一の人格を透し來つて始めて社會人類の教となるのであるから眞理を無視せる國家や又單なる眞理（部分的の眞理即ち開顯を仰がざる隔歴の眞理）を以て社會國家人類を指導せんとするものは俱に國家の災禍を招來するものこと心得ねばならぬ、其の眞理正法たる妙法五字は體用一致本末互映彼の西洋思想の如く美名を付して内毒を覆ふが如きものではない、苟くも思想を批判せんとするには即ち開權顯實の絶對眞理を握らんとするには其の源泉を精察せねばならぬ、名目に眩惑されたり枝葉に囚はれたりすることを許さぬ、「源濁レバ流清カラズ」の警告を嚴守して嚴密に觀察しなければ深淺廣狹邪正曲直は容易に判明しないのである。

聖人は直ちに此の宇宙の根本眞理たる妙法五字の最高思想に立つて世界の所有思想を開顯し統一せんとして此に先づ道義を以て建國の理想とした國のみならず、諸先哲の豫言を以て示された即ち大乘有縁の國たる吾が日本國を靈的國土と認め以て此の土に正法を建立して其の感化を世界萬邦に布き及ぼさんせられたのである、故に聖人は此の眞理正法たる妙法の教理に背く（謗法）國家は亡ぶも可なりとまで主張せられたのである。

されば即ち聖人は國家の爲めに法華經を弘むるにはあらで法華經の爲めに國家を築き所謂妙法五字を以て建設せる大國土を御理想となされたことは明かである、斯の如き見地からせば聖人の生を此の土に得たり、

豈に吾國を思はざらん哉の御言も單に日本に生れたから日本を愛さねばならないなど云ふケチな考へではなく世界人類の最後平安の爲めに特に道義的建國の日本を愛されたことは事實である、即ち正法を護持し弘布せんとするの國であるから或る場合正法正義に従はぬ國家とは命懸けで戦はねばならぬこともあるであろう、かゝる精神は聖人に充ち満ちて居られたから前に述べたやうに眼前の小事に拘泥せられず而かも他の宗教のやうに一人一人の教化からして最後に善を見やうとするのでなく、これも強ちに惡ではないが聖人は最も速に正法弘布を目的とせられたから、先づ國家といふ全體を對告としてこれを説かれたのである、其れには先づ其の當治者たる即ち其の當時の幕府の執權等から最初に目醒めねばならないといふ見地から之を其の許に提出して大いに覺醒を促されたのである。

強いて附言するまでもないが聖人は妙法五字の體驗の上の愛國者であることは勿論である、故に門下吾世界人類は俱にこの真理の示す所に従つて人類の思想及び行動を紮矩して行かねばならぬ。



吾が崇拜せる大聖人

吉 田 曙 人

英雄時代を産むか？時代英雄を出だすか？、茲に吾が崇拜せる大偉人、大聖者あり。果して誰ぞ？余は天下一の愚人日本歴史を翻き習ふ事數度に及ぶ然れ共未だ嘗て一人の崇拜すべき者真心より戀慕すべき人を得ず、所謂有徳者！國家功勞者！言ひ換ふれば忠君愛國者、大政治家等は枚擧に暇あらず。今其の中に於て二三の偉人を擧ぐれば忠君愛國燃ゆるが如き、楠公父子、近くば乃木將軍、學徳兼備の二宮尊徳、中江藤樹、政治家としては、最近明治大維新に其天才を振起して内外に其名を稱せられし伊藤博文の如き其人等ならんか。然れども彼等は何れも唯單に當時紊亂の世に出で、政治家或は忠君愛國家としての個人的又は國家的本

分を果せるのみ、従つて國內の渴仰は歴史と共に永遠に消えざれども崇拜の範圍狭くして、他國の人は是を知らず。然るに吾人が最も崇拜せんとする大聖人、大偉人は如斯き個人的若くは單に一國家の本分を全せるものに非ず、世界人類引いては宇宙全體の煩惱、業、苦、の三道に惱む生類に安心立命を與へ解脱を得せしめんとし四弘の大誓を立て給へり。時は是れ白法穩没所は是れ神州東海の一隅梅陀羅が家、法は是れ一代の歸趣諸佛出世の本懷なり、單身鎌倉の街頭に立ち、身に金襴の袈裟、紫衣を欲せず、麻の衣に麻の袈裟、末の尾笠に六度の杖、手首に大粒の念數を懸け、押し寄せ、押し返す人波の塵垢を浴びつゝ、四ヶ格言の法劍を振ひ、破邪顯正の矢を放ちて大獅子吼せる一怪僧！忽ち起る持品廿行の佛識刀杖瓦石、數々見擯出、遠離於塔寺等の大難に反つて廣宣流布の疑ひなきを喜び給ふ大聖僧抑も誰ぞや知らずや、是れ本化上行の再誕、立正大師その人なるを。古來幾多の聖者あれども未だ嘗て大師の如き人格、教義、及抱負を有せし人を見ず。

試に御遺文録を拜せよ、四大難の一、北海の寒島たる佐渡が島根に於て皮を剥いで紙となし、骨を削つて筆となし、血を以つて水となし、軒は一問、雪は一丈、壁落ち、柱朽ち、梁棟傾き倒れんとせし三味堂に於て身は流人ながら、書き認めたる一鈔名付けて開目と云ふ。此の文中に「我日本の柱と成らん、我日本の大船と成らん、我日本の眼目と成らん云云等と何ぞ其の言の雄且つ大なるや、内外の憂患踵をついで起り國家危急存亡の秋に當り身を犠牲に供して以て國難を救ひ、國家を泰山の安きに置かんとす、上人は國家の盛衰を以て一に國民の思想を支配せる宗教の直曲に有りとなし釋尊出世本懷眞實の法華經を以て國民思想を善導し以て國家を隆昌ならしめ國難を拆除せんとせり、而して此の經論は單に我日本國に止まらず、引いて全世界に及ぼし以て無上究極の平和及び發展を此の地上に實現せんと努力せられしなり。而して是の理想を實現すべき使命を有せるは一向大乘有緣最勝無二の日本國なり。如是き根本信念の下に先づ日本國內に其の教田を開拓せられしなり。此れ日蓮が使命なり。國家世界に對する本分なりと信じ以て顧みざりき。南朝忠臣、楠正成の忠君愛國家にも超へ、大政治家として自己のみにて國家を操りし、伊藤博文にも勝れたる大愛國家、大忠臣家なり。否恐らくは社會識者の等しく我と共に認むる所ならん、此の偉大なる聖者は未法濁惡、白法穩没、

惡鬼充滿の世に出で法華經の題目を以て迷へる人類をして悟の彼岸に到達せしめんごせり。嗚呼その大悲に思ふべし。報恩鈔に「日蓮が慈悲廣大なれば南無妙法蓮華經は萬年の外、未來迄も流布すべし云云」聖言虚しからず。今や我が大師去つて六百五十星霜然れ共その教や益々廣く、その渴仰や愈々多し、然れ共大法獨り弘まらず、古人云々大法の隆夷は正に其人に依ると、如是き大人格者、大教義、大慈悲を普く天下に説き以て社會を善導し發展せしむるものは唯吾本代の徒のみ有つて存す、勵まざるべけんや。



如何にして人心を統一し國民精神作興の實を擧ぐべき乎

古 童 每 水

社會に對して學校教育以上の効果を奏しつゝありと謳歌さるゝと共に、又一面に於て民心をして幾多の弊害へ導くものは是れ實に新聞紙及び雜誌等の文書類にあらずや、而して讀者も亦一日たりども之を手離す能はざること恰も食餌の必須なるに相似たり、近來我國有識階級に國民精神作興、又は人心の歸嚮統一を圖らざるべからざるを論ずる者あり、然るに言論の自由が憲法に於て保證されたる我國に於て人心を統一せんとするは此に多少の證衡を要する所なるべし、言論を自由にして置きつゝ思想を統一せんとするは、猶堤防を撤して水を一所に落さんとすると一班なり、夫れ昔時に於ける我國の民心は其指導を政治家に俟らし所多かりしなり、然るに近來に至り専ら新聞雜誌著述物等の言論機關及び多少の藝術等に依りて感化指導され、政治は殆んど事務の上に局限されたる感なき能はず、就中日日各新聞によりて報道され記事に載せらるゝ諸事項は、如何に人心を左右するかは喋々するを要せざるなり、而し其の一思想の潮流の漲るに至りてや、中央政府の威嚴を以てするも、尙其の一喝に遇へば忽ち昨日の命令を撤去して今日の鼻息を窺はざるべからざる

ほどの、最高所に立ち幾千萬の國民を指導して思ふが儘に左往右來せしめつゝあり、然るに斯の如き能力を有する新聞紙等は果して何人の手によりて書かれつゝあるかは、國民の過半は殆んど無注意の状態にあるが如き感なき乎、吾人は茲に多少の考察を爲さざるべからず、げに其の記者や能文多藝の士多く、博學達識の人亦尠しとせず、然りと雖も唯それ國民の所謂指導者として仰ぐべき者實に此の人なるべしと首肯さるゝ人格者の甚だ少なきが如く感ぜらるゝは確かに社會の大なる缺點と云ふべし、この點を看過して人心の指導を論ずるは甚だ徒勞に歸し國家の憂とする所なり、慊らざるもの豈ひとり新聞紙等のみならむや、職業は總じて社會の奉仕なりと云ふ見地より見れば、何業に對しても多少の不足を言ひたきは常なり、されど自らも社會の木鐸を以て許し、高く社會の耳目を以て任じ、而して事實上政治家以上に人心を指導する著述家の多數が今日に於ける状態に對しては憂世者の甚だ不満足に感ぜざるを得ず、殊に今日凡百の職業中新聞紙の報道はご其の職に忠實ならざるもの他になかるべし、これ正直のみの報道にては紙面の寂寞を感ずればなるべし、力めて人の感情を刺戟する報道にあらざれば、多數同業の中より見逃されんことを恐れ、又昨日の他社より出せしを今日するは報道の遲きを慮り、正誤をなす時は不詮鑿を曝らざるべからざるを醜ぢ、而して其の記事に於ては攻撃的破壊的に傾きしは是れ多數の下層社會に媚びる爲めならむ、こは上流の讀者に於けるも下層の讀者に於けるも一ヶ月の新聞紙代の同じければなるべし、實に下層は概して現状打破を希望し、從つて保護よりも攻撃を、保存よりも破壊を好む心理を有すれば、此の勢に乗じて唯其の賣れんことのみを希ふなり、されば此の種のものは何なる時に於ても其の社會を呪咀して止まざるを任務となさざるべからざるに至る、彼の新聞紙の如き特に人心を左右すべきものは其の報道よりも記事よりも其の論說にあり。

抑も其の論說を書く人は概して論說を書かすめむとして備はれし人なり、定められたる月俸を以て問題の有無に關せず、又思想の起不起に拘らず、其れ相當の數に滿つるだけの論說を書かざるべからず、而かもそれが眞逆其れ程に至らずとも、定論成法の講義のみには行かすして、所謂名論卓説を始終出さざるべからざるに至る、是れ實につらき商賣ならずや、其の他論說製作を豫約せる人の外に論說製作を内職とせる階級の

人もあり、これは収入と云ふ束縛なしと雖も偶々大向の好評と報酬の甘味に惑はされ遂には意見の有無に關せずして筆を執るに至る、是の如く現今我國に於ても論說屋と云ふ一種の商賈人否職工あるに至りしなり、勿論これ以外に報酬の爲めにあらずして、全く社會に問はざるべからざる意見、或は不平ありて自ら進んで著述又は投書する人無きにあらねど、實はかゝる人は稀なり、斯くして成りたる論說が其の界を脱して實行に入る迄は實に紙一重なり、思想が言論に限られて居る間は如何なる議論も大害なけれど一度實行の域に入るに至りては、直ちに邦家の運命に關すること尠からざるなり、故に國民の思想問題一に茲に繋り居と云ふも過言にあらず。

誠に夫れ政治の大目的は人心の統一國民精神作興にあり、然れば則ち政治家は常に民意の存する所のみ測量して只其多數の意に従はざるべからずとせば、問題によりては、其の多少の測量に非常に困難すべきに至るべし、されば言論は絶對に自由なりと雖も要は國民相互の自覺に上せたる上に於て其の取捨撰擇は最も肝要とする所なり、故に言論は國民多數の意思を以て嚴重に取り締らざるべからず、此の意味に於て國民全體の意思を代表せる政治家によりてならば、如何に嚴重に取り締るも何等差支なかるべしと信するなり、但此に最も慎重に考へざるべからざるは其の局に當る者の人格なり、こは獨り政治家のみならず、世道人心の指導者として自らも許し、社會もさこそと疑はざる宗教家にありては最も反省すべき重大事なり、然るに今は主として國民の頭上に立つて直接政治の舞臺に國家經綸の表に在るものに言を寄せたるなり、誰も言ふ近來我國の思想界は、歐洲大戰以來種々の新思想混入し來りて人心輕跳浮薄に流れ社會の現狀甚だ憂慮に堪へざるを以て、國體の精華たる忠孝節義の道義を獎勵鼓吹して思想を善導し國民の精神を維持して外來の思潮に打勝たさるべからずと、これ尤もの言ひぐさなり、されど思ふに忠孝と云ひ仁義と云ひ將た又節義と云ふが如き何れも人生に重んず可き徳義にして其の性質に於ては一點の申分なきものなれども、唯この單純一偏の主義を以て今日の新思想を制せんとするは猶は劍道柔道を以て新式の機關銃に當らんとするもの、如し、劍道柔道古しと雖も自ら其の用あり唯之を以て新式の武器に當らしむるの不可なるを知らざるべからず。

外來の思想をば疑心暗鬼一概に之を危險視し然も形式一偏の主義を以て之を制せんとするが如き實際に於て其無効なるを斷言せざるを得ざるなり、教育進み文化遍く人間の智徳は上下を通じて大差を見ざるの今日、自ら世道人心の指導を以て任じて醜ぢざる政治家乃至宗教家が其の策に於て其の人格に於て何等の反省するなくんば國民の思想を示導せんとするが如きは一種の滑稽にして又餘計のお世話と云はざるを得ず、然れども是等の人が果して人心の不安を以て憂慮に堪へずと爲し飽くまでも國民の思想上最善の努力を致すの精神あらんには爰に一法あり、即ち當の御本人が常に尊信崇拜して措かざる所の古人の訓言を體し身を以て率先して躬行實踐を心掛くること是れなり、支那の聖人の言に治國平天下は修身齊家より始めざるべからずと云へり、是れ政治と道徳とを混同したる所謂儒教一流の説なれども、元來思想善導と云ふが如きは道徳に屬するものなれば當の御本人方に於かれても政治は主義や政策に依つて行ひ道徳は躬行實踐に依つて行ふの區別を明かにし、區々たる形式的手段や方法は一切斷念して先づ其の一身の私行を慎むは無論、平素の一言一行も苟にせずして自ら其の範を天下國民に示さんことを心掛くべし、要するに先づ躬行實踐自ら一身の言動を慎しむこそ肝要なれ、其の効果の如何は兎も角もとし其の爲す所は全く無害にして亦以て天下の風教に資せんとする當人の志にも負かざるべし、然らざれば千言萬語も實際に何等の効果あるべからず、況んや躬行實踐なくして憶面もなく壇上にあつて道徳を云云する所謂賣名の徒あらば民衆先づ其の人の人格の表裏を吟味して汝何んぞ慎まざると互に責善することなくんば大講話の法陣千蕙せるも竟に空しく國民精神作興も唯舌先のなぐさみ、功無きの勞は徒勞なり、識者それ之を知れ。





科學は果して宗教を葬むる乎

富田海音

一

凡そ人間は人間らしく生きねばならない、近頃一般社會は自然科學の發達によりて現在の宗教に對して假令態度に種々の相違はあるとしても一言にして之れを言へば侮蔑的な眼を以て見張る様になつた事は明かである。而して又之れに對する宗教家其れ自身に於ても自己の内面生活や傳統の宗團の制度を反省して其處に必ずしも彼等の視察の誤りでない事を考へさせらるゝ時、自家の生活形式の上に多くの矛盾を見出した事も疑ひない、そこで互に最も眞面目な最も尊い生活の意義を見出そうと努力する時、そこには互に一方を辯護し他方をこぎ落さうとするのは其の目的でないのは云ふ迄もなく、從つて兩者がかゝる間隔を永く維持すると云ふ事は、人間其のものゝ意義を遂に失却せねばならぬと云ふはめに到達するのも事實である、さればことに能ふ限りの公平な態度から宗教や科學が人間に對して如何なる關係と意義とを有してゐるか、而して人間は如何なる意識を以て之を迎ふべきかを考察して見やう。

二

先づ宗教と云ふ問題から一言せねばならないのであるが、一體宗教其のものを私達から見ただ場合、現今の多くの宗教家が實際に行つて居る様な偶像崇拜や死人の埋葬のみが宗教其のものであり、又宗教家の爲すべき仕事の凡てあるとは仕うしても考へられない、又現に存在する幾多の既成宗教は、矢張り過去に於ける社會現象であり、其の當時の文化的現象であるとすれば、亦今日必ずしもそれが必要であるとは考へら

れない已上、それを以て、宗教の本質的發現の全部であるとは多分誤つた觀察であると言はねばなるまい、勿論斯く言つたからとして私達が前述のものを宗教已外のもの若しくは、迷信的産物であると言ひ切つて仕舞ふのではなく、それ等は唯、宗教の發現的形式の一種であり、又それが具體條件の一部分であつて、宗教をして、宗教たらしむる其の本質は、それ等のもの、外にあるべき事を言ふたのみである。

そこで宗教の本質とは何んであろうか、これに對する見解は必ずしも一様ではないとしてもそれが最も廣い意味に於ては全宇宙全人生を支配する處のものであつて凡てのもの、根底となり本源となる力であり人生であると言はねばならぬ。彼の波多野精一博士は之れに就て批判哲學の立場から論談した。

宗教の本質は理性の普遍妥當的價值を私達に於て、又私達を通じて其の價值内容を實現する超越的、絶對的、實在の顯現として體顯する事に宗教の本質は存在する。

と云ひ又カントは、

宗教根本的眞理の内容は、道德的理性を絶對的實在として認識する事。

であると説いて居る、ごちらにしても人間が生きて行く上に於て如何しても之れによらねばならない。そこに宗教の宗教たる價值があるので、萬古不易の大生命が流れて居るのである。

已上宗教の本質に就いて其の大體を述べた、これから科學に就いて其の要點を言は、科學を分つて、自然科學と、精神科學とに別つ事が出来る、即自然科学は、物理化學、動物學、植物學等の自然現象を物質的に考察するものにして、精神科學とは、心理學、倫理學、法律學等の世界の經驗界を分析的に研究するものである。次に是等の諸科學即ち特殊科學に對して、其普通の原理を探究するのが今の經驗界に對し概念界に當る哲學である、前者の分析的科學に對して、後者は綜合的科學、前者を形而下學として後者を形而上學と云ふ事が出来る、此等兩科學の職分は現象界の事實を基として其の特徴を發揮し人類生活の上に益々眞善美の花を咲かせ其の生活に愈々幸福を齎らして人生の眞の文化生活を顯現するに至る、此處に宗教と科學の融合一致をも見出す事が出来ると思ふ。

即ち宗教の本質は人間生活の全分換言すれば物我一如の一大生命を與へ其處に安心立命の極致に到達し得るのである、宗教は前述せる如く人生生活の全分で且つ根源である、科學は同じく人間生活の產物ではあるが部分的である、故に根底に於ては此の兩者は密接不離の關係にあることは勿論である、特殊科學は哲學に依つて價値づけられ而して宗教に依りて人間の所有として眞の生命を附與されて生きて働くに至る、唯一應之れを研究する上に於て別つて見るのであつて科學と哲學は智的研究、宗教は情的信仰を以て對するのみである、如何に諸の科學が學理的進歩をしても人類が最終の欲求たるべき、安心立命が得られなかつたら其の文明も何の効果もなく宛も砂上の樓閣に了つて仕舞ふ。故に兩者は相俟つて文化生活は營まれねばならぬ、科學に依つて文化に華咲き宗教に依りてそれ等一切を綜合して眞に人間の物として前に満足を得るのである、兩者の關係は固より人間が眞に生きんとする要求より產出されたるものなる已上、そこに必然的關係の存するは言を俟たない。

以上科學と宗教とは密接不離の關係である事を述べた、現代科學の文明は燦然たる花を咲き競ふて居る、然るに我か宗教界は、依然として因襲的形式のみに囚はれて居るものがある、假令ば佛典の文上のみに趨つて御守、御符、咒文又は護摩等の如く、尤も此等は教理の産なりとして大體に於て甚だ恠まざるを得ない、是等只人間としての所謂文化生活に價値あるべき最終理想に惹き入るべき一手段として一時は許すも是れを以て眞に宗教の本質なりとして布教弘宣する様では、極力反對せねばならぬ、現今の民衆は、文化發展に伴つて是等の迷信的、盲目的、信仰打破の問題も、有識階級には唱導されつゝある、將來人類は、益々科學的になればなるほど、因襲宗教は無智蒙昧者のみの玩具として取り残されて、何等の權能を維持する事能はざるに至るは當然である。

苟も現代人を指導するには頑強なる形式的ではならぬ、根底に横はる眞意義の發露と其の力に依りて指導

することを欲するのである。即ち人間生活上眞に缺くべからざる價值あるものでなければならぬ、現代は通觀して、ある今過渡期、此の期を逸せず從來の因襲的頑強なる形式に囚はれずに改善する必要があると思ふ。

吾祖は既に業に此の合理的宗教を題目の七字に結んだ、之れ永恆不易なる真理であつて、人類普遍的に歸依すべき根本原理にして智情意三方面に何等の撞着を醸すことなき、一大宗教として世界的に紹介する價値を有して居りながら餘りに目醒めないことを慨嘆するのである。已上



文 化 說

靜 溟 生

夫文化者之生、俟於人、人也者文化之主體矣、今觀世間、崇其力用、尊其能率、將迎之者、是自然科學也、然而其業績也偉大、其應用也廣汎、眞足使人驚心愕目、世謂之文明、以爲黎民由是厚生、國家由是富裕、雖然、今人益苦其矛盾、欲解愈煩悶、是果何乎、曰據偏重科學、故宜使驅者、反及爲使驅、是其弊也、夫爲造由目的者、所壞由目的、但爲不於人生、技工之產物者、人之所有、而莫爲是所役、爲是所役、則失價值、失其價值、則不能爲文化之主體矣。





支那回教徒の運命觀

大 峰 龍 正

山東鐵道の終點濟南市街の一角に高く聳ゆるは千佛山である、之は回教の大寺院として有名である、春の項吾々は教門の門牌ある門の頭に千佛山進香の赤旗の往々に翻へる奇觀を認めた之は各地方から入り込む千佛山詣りに教徒が宿を借してゐるのである、一日私は此處に遊ぶ抑も現今の支那佛教は昔日の如くならず、殊に山東にありては教風殆ど頽れて其の風や實に無殘の有様である、尤も一見した所では寺院は大きく師傳は多く一寸外見には如何にも盛であるかの様に思はるゝが、其れはホンの外觀で内部を観察する時には全く問題にならぬ、毎日御勤めして居る多くの師傳の如きも實は之れで以て只今日の生計を維持するのみに意を用ひ到底敬虔の意から出て居るものとは思へぬ、次に彼等の説く運命觀に就て問へば 爾等如何に聰明なるも未來を窺ふ事を止めよ、爾等の未來は唯眞主獨り知食す爾等の努力は毫も爾等の未來を轉するに功なく爾等の用意も現在の運命を變ずる能はず信者よ唯主命に依つて未來の幸福を祈るべし とある程で甚だ窮屈に説かれ現世に起る禍福吉凶善惡正邪凡ての事象は悉く神意に出づるものであつて眞主は已に豫め定めて居らるゝが只深く其れを祕して知らしめ給はぬのである所謂萬物總ては此の運命に従つて生じ長じ働き死し癒て復審を受けて來世の運命を定められるのであると云ふ、然らば已に豫め左程迄細かに運命が定められて眞主が只示されないばかりとすれば最終日に於て何も審問する必要はない筈である、又人間に取つては何も働き甲斐がない、其の説明をと聞けば「宿命は海の如く自由は船の如し」と云ふ即ちあらゆる宿命は其れ々々其の人に依つて定められてはあるが、其の宿命の範圍内では其の人の望み次第次第で丁度船が自由自在に大海を航行し得る様なもので決して規定の道はない、但し如何に自由とは申せ其の海より外に船は到底出づる事

は出来ぬ若し一人が大賢たるの運命があるとし其人が全力を注げば其大賢迄は到達する事が出来るが大賢を踰へて聖域に入る事は出来ぬ其大賢と云ふ程度が即ち運命である、其人の勉強の度に依つては愚に終るかも知れぬ善人で止まるかも知れぬ、愚となり善人となり或は大賢となるは其人の自由で其れには何等の拘束もないが万全の注意を拂わぬに於ては如何に努力するも目的を達し得ないは丁度航海者の不注意にて不慮の難あるのと同じである、人事を盡さねばならぬは其處であると云ふ。



四 顧 寂 莫

三 基 生

ほんとに寒い又雪でも降りそうである、一昨日の様に降つて積ればいゝが……そつと万年筆を抛て灰色の空を見た、もう時計は四時だ、いつもの掃除とは思つたが餘り寒いので湯をわかしてもらつてからにしよう、炬燵に入つたパチンと櫻炭がはねる掃除を終へて寒風に吹かれ乍ら側の小高い身延ホテルの空道を彷徨した冬枯のお山は静かな死の沈黙にひたつて行く様である、夕陽は已に思親閣の彼方に落ちて色寂れた薄暗は静かに地を這ひ籠むる、そしてひやりと肌寒い風がしみと食ひ込む様に吹きつける。

靈山を眉前に控へほのかに七面の峰も目に映じ身延町は眼下に見える家並からは夕餉の煙りが淡く立ち昇つて行く谷間のところ々に消え残つたほの白い雪が枯れた草の上に淋しく息づいてゐて二三羽の鳥が鳴きながら舞ひ下りたおどろした瞳であたりをくるりつと見廻りやつと安心した様に歩みながら食をあさつて

ゐる、お山は全く黄昏の色に抱擁されて夕闇は自分の足元まで攻めて来た土産館のイルミネーションは殊更
するどく光つて居る。

ゴーンと響く暮合の鐘の音は淋しく夕空に餘韻長く流し谷間を越えて峰へへと廻つて行く三千四百尺の
鷹取の山の端には氷つた様な半弦の月が輝いてゐる……四顧寂莫朝師堂の木魚仁王門の唱題修行の法鼓の音
が夜の静けさを破つて聞えて来る。
おう寒い……身をふるへ乍ら坂を下りた。



思ひ出の記

鳥海山人

三月の末の方とは言へ、残雪の上を這つて来る風は、かなり膚にこたえるほどであつた、止めどもなくい
らだつて来る心は、一種病的とも思はれた、幼い時から撫でつ、叩きつした根木橋の畔に樹つてゐる柳は葉
は落ち盡して幹は眞黒に、何處に春が籠つて居るとも見えない、併し春はきつと来る、春が来て死んだやう
な柳は縁に息ふきかへすのもわづかばかりの間である、然し吾生の春は何時、吾芽の吐くは何れの日であら
うかと、あせる心の抑揚は順調を得て居らなかつた。

此の柳を後にしてから、もう四年も経つてゐる、流石朝からの往來の繁く、立ち並ぶ店の賑合も、成程日
本一の都と思はれた、此の中からは何物かを探し得られるであらうと、先づ一驚したのも過去となつて終つ

た 心の全分を充たし、而うして求める方向を指示して呉れるかと思つて心理學を學んだのも誤りであつた。手取り早く「善」の世界へ導いて貰へさうに考へて倫理學を學んだのも愚な考へであつた、哲學を聞いても人生全部の解決はをろか、寧ろ物淋しい氣が高調して行くばかりであつた、本當の人生の奥底を流れてゐる生命をば、外部から徹底的に理解し汲み取られるやうにして貰へるもの、やうに思ふて來たのは實に低級な皮想の見解であつた、旅から旅へなど、言へば餘りに大袈裟に聞えるが、心はまだ旅から旅へさ迷うてゐる。

或る日曜日の後であつた、せめてもと思ふて友を澁谷に訪ふた、九段坂上あたりから三宅坂の路傍の櫻樹は殆んど落葉した、でも柳はまだ汚れきつた葉を大事さうに蓄へてゐるのが慾深さうに見えた、短い秋の日は、はや西に傾いて、風の音さへ澄み渡つて來た、夕陽を帯びた霞ヶ關一帶は、さすがに夕暮の哀れさを見せてゐる。

友は國から來た母をつれて外出した後であつた、もう五時は過ぎてゐる、入日の影も何時の間にか消えて空には星影寒く數へられた、下町一帶を包む夕靄の中に、まき散らされたやうな電燈も淡い光を動き初めた。

失ひ物をしたやうな氣で餘儀なく其處を去つて再び込み合ふ電車に身を托した、廣小路で降りてから、夜店や群がる人々を外目に見て、御徒士町まで歩いた、葉もまばらに荒んだ街路樹の間から、電燈はあか／＼と光線を投げかけてゐる、何か専心に讀みながら、鈴を鳴らしては、時々、機械的に、「夕刊」「夕刊」と叫ぶ某中學の制帽を被つた一少年が、其の樹下に寒さうな姿を寄せてゐた。

所謂革命も鬭争も、これを餘所事に眺めてゐるうちは、實に痛快に覺える、恰度火災を熱い紅葉と見ることも出来るやうに、色々な悲慘な境遇に置かれた個々の生活も、世相を賑はす一材料として輕視する時は、さまで心苦しくも思はない、然し一たびこれを内觀靜思した時、凋落しかつた秋の寒夜に、斯うして行かねばならない境遇に置かれた彼は、よし目的は異つて居るにもせよ、それが求めんとする努力は異なるまいと

想像し暫し同情の眼を送らずには居られなかつた、昨晚も此處に斯うして居つたのだらう、又あすの晩も、
「樹よ汝はこの一少年の伴侶となつて彼をして必らず幸あらしめよ」と祈つてやつた。

日月晝夜と常に序を追ふて進んで行き、且らくも止ることはない、春は往き秋は來り、又々草木の零落するの時に逢ふた、日は暮れて道遠しの感すら涌いて來る、がしかし、もつと内的生活の革命への旅をば續けて、本當の生命、それは平面的でなしに厚さも深さもある、永遠の生命を握り取るまで、努力して行かねばならない、否斯うして行くこと其のことが賦與された生命其の物へ深さを付けて行くのである。

如何に乾ききつた高原の土も、急がずに、休まずに、穿鑿して行かば、聽てはきつと泉に到達することが出来るのだ、世相に於ける個々の事件、否一草一木もわが爲めに道を傳へ、生命を深める永遠の相手である、畢竟この世界は吾等の活動の舞臺であるよと考へつゝ知らず識らずの間に家に着いてゐた。

以上は余が一昨年晩秋を追懷して記したのである、過去を追憶するやうでは、おれも年をとつたものだから、聊か淋しくもないでもない。



人 生 の 富

長 瀬 龍 光

富は何物かの代價である、何者かの報償として之を受くるのは、貪るべきではなくとも少くも否むべきでは

ない、されど唯富のために富を貪るのは明に賊である、神州の日本、文化の風の吹き荒むと共に此の盜賊の跋扈するのを悲しまねばならぬ、現代の日本は勞れて且貧である、國富の増進は刻下我國民の義務であらう。然し貧だからとて盜賊する權利は得られない、急務の爲めに盜賊は肯定せられない、斯くて吾々は吾々の祖先に對して辨解の一辭柄をすら有ち得ない、昔の人ば髮こそは埃だらけの結髪だつた。然し「武士は食はねど高楊枝」と揚言した、「土の子は腹が空つても餓じうない」と壯語した。奇麗に分けた輝く髮は美しい。然し現今の人士には此の半分程の氣概もない「ひもじい時の不味い物なし」と唯一の言ひ譯として他人の手から奪ひ取つても自己の口腹の慾を充たしたいのである、勿論食ふことを恥づる者は生存を恥づるものである、敢て食はぬといふところに價値の存するのではない、飢餓に處しても、取つて動かざる節操を望むのである、この儘餓えて死ぬとも、盜泉の水を呑まざる自制心が現今の人にはない、阿彌陀も金で光る世の中である、都會も田舎も、唯動くは金、物質慾を外にして現代の人々を動かす原動力はない、富は凡ての解決者である。終極の歸趣は富である、富を離れて現代の人々に倫理道德は説き難い、主義も節操も富の前には何等の權威に値しない、人として貧ならんよりは、獸として富まんとする、斯くて尙文明と言ふならば、文明なるものを咀ふべきものだ、現代は、富豪のみ獨り富の爲めに誇り、貧者亦唯此のために富豪を尊み、富豪を羨む。唯一の價値を富に置く現代の思想から考へれば敢て無理はない。其の富を有たぬ者が之を待んと焦るのも自然だが、一般が理想として追求するものを自己に於て有し、且自身自からが一般の目的であると自覺した富豪が誇り奢るのも自然である。唯其本に歸つて、富そのものが悉く尊むべく、追求すべき價値ありや否やを考究せねばならぬ、キリストは言つた、「富めるもの、天國に入るは、駱駝が針の穴を通るよりも難い」と。實に小人玉を抱いて罪ありである。情ない吾々は、動もすれば機會を求めて迄も道に反かんとする。機會の得べからざるに至つて纔に止むものである、人格の向上を後にして、多くの機會を與ふる富を先にすれば吾々は何れの時か道に反かぬ人格を涵養し得べき。せめても機會を有ち得ないのが、此の人格に達し得るまでの吾々には安全ではあるまいか。然し富が罪惡の唯一機會ではない、富に因る罪惡の機會は有ち得ない人も、貧

に因る其の機會は保ち得る。人格の未だ到らざる吾々は、富に因るも貧に因るも等しく罪の子たるを免れな
い。されど斯くて、益々富は吾々の終極の追求物ではないことを明にする、然し理窟は然である。けれども
悲しいことには「吾々の情意は理性の知らざる多くの道理を有つ」とバヌカルも言ふた「哲學上の議論は如
何ともあれ、今日までは飢餓と戀愛とに依りて世界の機械は動く」とシルレルも嘖した。富によらずんば吾
々の情意は満足しない、物質を追はずんば吾々は衣食の資をすら得ることは出来ない、之をしも追ふ可から
ずと言ふならば明に人を驅つて木石たらしめんとするものである。飢え、凍え、而して死ぬと命するもので
はあるまいか。吾々の努力は人格を中心とするものである、終極の追求を人格に向けんとするものである。
須らく富の爲めに富を追求するを止めよとは要求するけれども、人格の爲めに追求する富までも否定するも
のではない。何物かの代價として富を受くるのは正當の權利である。何物をも與へざる富の強請は盜賊の態
度である。彼は人格の成素であり。此は人格の缺損である。

富は何處までも外的の付加物である。一時的のものである。得るも失ふも同様に偶然である。偶然の附加
物を得て喜び誇るのも愚だが、之を羨み此に趨るものは一層の愚である。眞に誇るべきもの、眞に羨むべき
ものは永久にして必然たる實質の價值である。

靡爛風の下、佛を導いて祇園精舎に入らしめたのは偉々しい長者の萬燈ではなくて、見すばらしい貧者の
一燈であつた。外容に於て優つた長者の萬燈が、貧しい一燈に及ばなかつたのは、實質に於て缺くる所があ
つたからである。賽錢の額によつて佛の慈悲に厚薄があるならば、佛の慈悲は市井の賣店である、百萬の賽
錢も終に半錢の喜捨に及ばない、のは稀ではない。終極の勝利は實質の價值によつて決定される。

物質欲に馴れた眼には佛の慈悲、佛の救は甚だ不安定に見ゆる。甚だ頼り難く感ぜられる。お題目では腹
は膨れぬ。佛を否定せないまでも、その救は餘りに氣長いと思はれる。然し欲求のない處には努力は起らな
い。努力なしに得る價值は迷妄である。物質を追ふに忙しい人々は始めから佛に對する渴仰がない。隨つて
佛々に頼るの努力もない。彼等が佛を頼り難いとするのは本よりこの處である。

肥穡擔ぐにも誠心試意の努力を要する。苟も一生の歸趣を求むる上に於て、衷心の誠、渾躬の奮勵を要するのは言を俟たぬ。佛の救済を期待し得ぬと思ふのは、誠心の披歴が足りないのである。お題目で腹が膨れぬと思ふのは誠意の唱題が至らないからである。罪は佛にあらすして自らにある。物質の欲求は投機によつて満されることもある。坐して父祖の讓をも受け得る、幸にも佛の救は投機では得られぬ。佛の慈悲に父祖傳來はない。斯くて佛の加被は偶然ならずして必然である。一時ならずして永久である。外見の付加物でなく、實質の要素である。

此の實質の要素を得て、吾々の人格は大に有力たり得る。吾々はこの根據に立つて大に天下に誇り、天下に怒號し得る、往來繁き鎌倉の町、四辻の真中に立ちて、禪天魔云云と獅子吼し得た聖日蓮の慨は是である。「四海の黔首ひれ伏して霄邊の威に聲もなしてふ」時の執權を目して、「僅かの小島の主」と唱破し得た聖日蓮の誇は斯くも峻烈だつた。春稍深き東海の浪に燦く旭日に對し、唱題の聲高らかに開宗を宣した高祖の意氣は、此時に於て己に天下を呑んで居る。將軍物かは、執權物かは、衆生濟度の堂々たる軍容の前には、何物の痴漢がよく頭を上げ得たる。威武も屈する能はず富貴も淫する能はずの快心事は、之を遺憾なく我が高祖に見るのである。天下百萬の物質主義者、果してこの高祖の驥尾にだも附し得るか。悲しいかな、外的一時的の付加物を唯一とする彼等には憐れむべき小作人や勞働者の叱責よりも有力ではあり得ない。否彼等幸に此力を有し得たりと自信するならば、是れ明にカンフル丁幾の興奮に過ぎない。

物質の追求は未だし、富は吾等の目的物たるには餘りに無價値である。男子の追求は正に此の高祖の慨にある。男子の誇は之を雖れては成立しない。





雜 想 三 篇

檄 國 士

靜 溟 生

予於天下之志士，敢勸勞働、尙哉勞働也、以剛健不撓、而爲勞働者、常得生希望之天地、夫人生活動之舞臺也、然而處於是者、無希望與理想可乎、世有欲終醉生夢死、薄志弱行之徒、又有倨傲腆、且貪虛名富者、前者不哀、後者可排斥也、天地萬里、於光明之所湧、希望所滿、煩悶處世行路之問題、敗竄者可憐焉、如彼己對可取業、無熱誠無自信、但徒朝變暮改、以求安逸慰樂耳、又焦慮眼前之虛榮、自身以外不認他人及社會、無視道義之根底、而弗省、若前者不能解有趣味之處世、齷齪而無爲一事樹一業、送一生於夢裡者也、若度者、亦惰民之一類也、是誠精神上之死亡者、弗然者、社會之蠹毒也、苟謀富國文明、爲國士者、安得不憂患哉。

警 薄 志 弱 行

有人問曰、何其亡身、答曰因意志不鞏固、曰何得持身成就大事、曰情盲目故第追快樂之影耳、不明智、則乏利害得喪之觀念、然若意志弱、則心雖知其非、不能斷行而改、然則處世最要任意志鞏固也、人之意志鞏固也、猶家之有柱也、舟之有楫也、舟無楫則覆、家無柱則傾、人意志不鞏固則亡其身必矣、

幸 福 者 何

試問青年之士、卿等所望何也、利乎、名乎、榮華乎、否成聖賢而說道乎、將又成富豪而積幾百千萬之財乎、人各異於其所好、聞蟲食麥、何故不食蘿蔔邪、是甚愚言也、卿等向其所好而可猛進也、夫官位勳爵高者非必貴者、富者非必幸福者、有名者非必傑者、無名者非必劣賤者也、人誰有不樂幸福者、然爲其幸福、由人品高下、有以異也觀造莊、畜美妾、日食耳視、以空一生者、舉世以是爲幸福也明矣、或謂是人生本能之所命也、雖然、苟有理想者及有教養者豈遂本能之滿足而已耶、又何望一身一家之幸福而已耶、嗚呼是志士與俗人、君子與小人之分歧點也矣。



芬陀利の峯

H • M 生

おゝ芬陀利の峯よ、

氣高きあこがれに燃ゆる芬陀利の峯よ、

慕ひ登る男の子女の子らは、

はるかに爾ちを仰ぎ

誰か喜びの胸おどろかせつゝ、

叫びをあげざるものやある

× × × × × × × ×

想ひやる果てしも知らぬ、

大地の底の底より生えて、

紺青の空いや高かれど、

富川のほとりよりそゝりたち、

雲を分け雲を抜け出づる芬陀利の峯、

× × × × × × × ×

おゝ芬陀利の峯よ、

白雪は麓に低く收まり、

朝日にさへて浮び出る時、

わが魂は喜びにふるひたり、

すべての高き優れたる力を、

慈母の如くなげかけて、

弱き心を拭ひ捨てつゝ、

× × × × × × × ×

一たび谷間に下りて爾ちを仰ぐ、

戀人を見る如く、

或時はまばゆげに、

或時は怖るゝことなくいひよれど、

爾ちの恣の氣高さに、

あだし心は忽ち消えて、

只仰ぐことにも凡てが充たさる、

× × × × × × × × ×

いかなればかくも氣高し、

此の世の嵐悲みを遠く抜け出で、
聖き者其のまゝの姿して、
只雄々しくこともなげに、

そは解いて盡きぬ永遠の謎のごと、
蜜を充たせる芬陀利の峯よ、

(一三、七、一)



復 興

吉 川 啓 善

大なる破壊の後には必らず大なる建設あるべきは自然がもたらす真理だ、そして亦事實だその破壊の後に築き上げられたもの、否奮起して再び造り上げんとするを復興とも云ふのだらう。

亦現今の一般民衆には殊更復興の二字は鮮明に腦裏に畫かれてゐる事も事實だ。少なくとも昨年の古今未曾有の大震災あつてより以後は常に國民は復興的感念に立脚してゐる。

余は今復興の二字につきて何物をか記るさんとするに當り矢張あの悲慘極りなき大災害を目前に浮べざるを得ない、過去に在りし事ながら今尙ほその恐ろしき煽の中に苦しめられてゐる如き感念に捉らわれてゐる人人も多からし、けれど人士必らずしも憂ひ悲しむべきか否今回の大災害は決して決して滅亡を意味するの

ではあるまい。要するに自然の神は眠れるものに或は物質的欲望に酔へる彼等に覺醒を促したに違ひないのだ。

去る九月一日恐るべき音響と共に投破されたその轟の中には神は必らず「醒めよ醒めよ」と叫んだに違ひない。斯ふした時是の無言の修養に感動されて大いに正義の道に奮起するものこそ眞に徹底せる幸福を得るものだ、即ち復興の大なるものであらねばならぬ。

然るに今回の天災は必らず物質的の復興を意味するよりも寧ろ精神的にモット／＼目醒めよと教へられた事と信じて止まない、而して民衆が精神的復興に努め純真なる日本國民として崇高なる思想を養生するに至らば自然總べてに於て徹底せる文化の世界を建設する事が出来るのだ。

然るに修養訓練の缺いた我國民は今度の大慘害に當面して決して心的結果を來たさなと思ふ、何んとなれば災害と同時に起つたあらゆる犯罪に見ても又流言蜚語に惑はされた事より見ても又一時元氣を恢復して或る仕事に着手しても被害の甚大なる爲に思ふ様に其の事業が成立せざる時其の間より諸種の缺陷を曝露し來るかと思ふ。故に此の際は強烈なる精神的感化力を有する指導者を得て心的修養に努めなければならない。その指導者たるべきは靈格の日蓮聖人であらねばならないと思ふ。斯くて復興と云ふも唯表面の物質的復活のみを以て足れりと思わずに何より精神的に向上發展の道を開拓し從來の盲目的感情や淺近なる科學的理智や法律萬能、經濟萬能、政治萬能、教育萬能の夢より醒めて、ほんとうに復興的氣分に生きて更に堅實なる國家の建設に努力奮闘せなければならぬ。

燒野が原

秦 觀 行

コスモスの誇も消へて寒風に

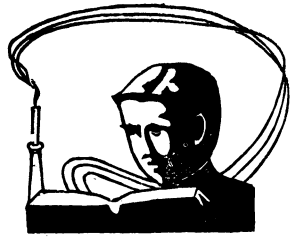
落葉ちりしくむさしの原

はてもなき燒野が原に風さへて

さびしさの限りなるらし時雨降る

夕ぐれさむく鴉なくなり

燒野が原の夕ぐれの空



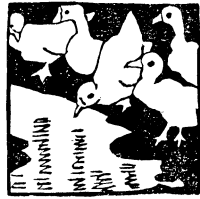
御山の曉

渡邊智榮

「偉人棲居の身延の曉」なんと云ふ神秘的な清冽な言なんだらう。峯に真如の月澄み渡り木梢に一乗の果を結び流るゝ小川の水までも妙法五字の囁きとたへられる御山の夜は空高く煌めきし星かげも稀になり行きて静に流れる梵鐘の餘韻と共に有し日を物語る血と涙とに苦むした身延のすべてはおぼつかなき吐息の様なる靄氣に打薫じて風もなく音もなく静かにほのめき行く。

今も昔もここならさる有難き御山に有し日の面影やうつると停回顧望に心緒みだされ、せめても偉人棲居の跡を拜せんと、ほのめき流るゝ大鐘の餘韻を耳奥にのこしつゝ、静に起きる誦經の不斷な梵音に引かされ芳薫漂ふ大堂の御前にぞむ時清く流るゝ法の朝風に頬を打たれ秘める棲神の面影を、ろに浮ぶ時思はず合掌の一刹那に感得する所詮口では言ひつくせぬエクスタシイの境地に充たされぬ。

すでにして日は東山より出でぬ、其の金色の光は始め柔かに次第に強く身延川の朝がすみを貫ぬきて轟々亭々と聳え立つ杉並木の上を通つて宏壯雄大なる大莊嚴の内に流れるにぶき鉛白色の七面山は見るゝ透き通り麓の谷はまだ朝がすみにねむる!! 其の清麗!! げに身延ならではと覺えぬ。あゝ詩にもがな、繪にもがな。



偶 感

S
K
生

現今社會から眠れる宗教家墮落した僧侶と高唱せられしことは長い間の問題である。

斯くの如き謬想を一般民衆に植え付けた原因は吾々宗教家に基因するものといつても過言ではあるまい。ア、今日の宗教家を此の儘に繼續したならば大自然の力のある如くいつしか社會から墮落した宗教家として葬られることは理の當然である。昨年震災以來種々なる悪思想の洪水が氾濫し今やヒマラヤ山上を潤さんとする今日宗教家の最も奮起すべき時正に目前に迫れり。醒よ、眠れる宗教家、汝等は人間といふ貴い靈を救ふべき大切な使命を與へられてゐることを知らざるか。而るに現代の宗教家を見るにこうした人間の靈を救ふべきかの問題よりも如何にせば財政を豊かにすべきかの問題に没頭して富豪の信徒の機嫌取ることを専らにしてゐるのを見て疑惑を起さずにはおられない。如斯事實が際限なく繼續するとせば正に是れ宗教家の墮落によつて宗教の生命を自滅すると云はねばなるまい。

現に自覺した民衆が墮落した宗教家と非難するのは之れに基因するのである。

こんな状態でどうして社會の人々を救ふことが出来ようか、社會を救ふよりも先宗教家達の其の踏み入れた迷路から引き返してくるのが最大急務である。こうした腐敗と墮落とに充ちた現代の社會を天國淨土に改造せしむべき宗教家を吾人は要求するのである。

靈界の偉人日蓮上人程改造を叫んだ人はおそらく此の宇宙間に二人とあるまい。亂れに亂れた彼の鎌倉の街頭に立ち時の天下を救濟せんと大抱負のもとに四箇格言を絶叫せられ向ふところ敵なしの勢で奮闘せられた。

今や復興途上にある帝都と共に宗教家が復興と相俟つて愈々現代の墮落した宗教界を改造すべき時である奮起せよ、本化門下の青年宗教家よ一天四海皆歸妙法の理想に生きる吾等第二の日蓮たるべきを自覺せよ、所謂大上人訓誡叱咤された「佛法ヲ學シ謗法ノ者ヲセメズシテ徒ラニ遊戯雜談ノミシテ明シ暮サンハ法師ノ皮ヲ着ケタ畜生ナリ」この徒になる勿れ。二陣三陣續けよの御聖訓を奉載して世界の柱世界の眼目世界の大船と自覺し奮起する宗教家の現れんことを吾人は要求するのである。



「涙」

深 敬 道 人

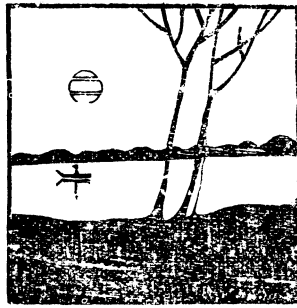
「涙」!!

それは善か悪かは知らないが、それが感情の發露であり表現である事を私達は認識せずにはいられない。何時か私は或る婦人雜誌で「涙は婦人の武器なり而して如何に此の涙によつて男子をして墮落の巷に迷はしむる事よ」こう云つた意味の記事があつた様に記憶する。

小供と婦人とは涙に於て否涙跪いといふ事實に於て程度迄の共有點を持つてゐる様に私は考へる。而し小供は單純な感情に支配されての涙であるが婦人の涙の或る一面が男子をして墮落の巷に立たせるの涙であるとはげに恐るべき事である。總てをこうした感情の表現たる涙を以て事を處理して行かうと云ふ事は誤つてゐる。そして總てが涙を以て解決されるならば此の世は涙を以て満たされるであらう。而しよく考へると此の涙がその善惡に係らずその問題を容易に左右する事が出来る偉大な力を持つ事實を、私は或る程度迄これを認識し肯定したが、その問題その事件をして前途幸ある解決を興ふるや否やは問題である。

私は一途に涙を以て事を處そうとする考を否むと共に涙が單なる純潔な感情の發露としてでない涙! そう

した罪惡的な至純ならざる涙を否定したい。
涙は神聖であり、侵すべからざるものである。至純でなくてはならない。眞の感情の發露として表はるべきものでなくてはならない。(大正十三、二、二七稿)



靜寂を破る響

吉 益 正 光

にはかに眼界が開けたと思つたら最早中腹に迄來て居た。まだ降りたらぬのか灰色の雲は空一杯になつて居る。昨夜聲なく降つた雪は今日この墟落を玉山銀臺と化せしめた。

太陽は西嶺に度り、ひやかな斜陽は時々灰色の雲をとほして、郡山を照す、實に靜寂だ。

騒しい物音は一つも聞えない。そして目に入るものは冬枯のさびしき山々、峯々と、それを被ふ清淨の雪や、夕飯を急ぐ煙だけである。子供等も遊びつかれたか、家路へ、三々五々、依々として去つた。廣い天地何の響もしない。沈寂を破つて木鐘の音が山下より起つた。嗟夫、ゆかしき木鐘の音、それは今猶、聖祖時代の清淨を語るが如く聯々として、つゞいて居るのだ。此土は安穩にして天人常に充滿せるを狂子に知らざんが爲に朝に、夕に、響いて居るのだ。嗟夫幸福なのは我等だ、そして草木だ。

終日、實相眞如のみ法を貪り。草木によられし聖者のみあとを慕ふ。廣大無邊な、み佛の慈悲も我等には

にはこの黒子の地にのみ與へられて居るのであらうかと疑はれる。

太陽は西に沒した。暗い暗い夜の幕は刻一刻、此山里を襲ふ。嗚呼夜が來た。さびしい夜が來た悵然たる折しも久遠の梵鐘は一聲。この山里を震はした。

——(身延ホテルの丘上にて)——



我が書齋

二 宮 龍 巖

與へられた室の一隅は私の書齋だ。單調と無味を柔げる爲に机上に小さな一つの花瓶に一輪の秋菊の花を挿して、それで私は充分に此の書齋を愛する事が出来る。悲しい時にも嬉しい時にも私はこの机の前にどつかと坐る、と挿した秋菊が私の眞の友になつて慰めて呉れる。二三日前に室の入口に『來者不拒之去者不追之』と書いた紙片を貼りつけて見た。この書齋が『私のものだ』こう思ふとき室に對する強い愛著が起つてくる。(大正一二、一〇、九稿)



凝 視

今 泉 智 旭

みるまゝにやまかせあらくしぐるめり都も今は夜さむなるらむ。

千年の昔、雲上人が熊野の山に詠せられた此の歌、所と時と想とを異にしたSは今身延の山の夕景を眺めつゝ寂寥、煩悶、焦想とに閉された胸を抱いて足ばやにきざみ行く夕雲を見送つてゐる。

笹箒を引き千切つた様なあの雲に、金線を織り込んだ様なあの雲に、自然は何を語ろうとしてゐるのか、神は雲に何を暗示せしめ様とするのか、地上に蠢動する人間は自然の無言の教、神の暗示を一寸だに解り得るだろうか。

深い沈黙はつゞく、神は存在するか、魂は何れへ歸納するか、又どんなに活動するか、顯界があるから幽界も當然あるといふあまぬるき答に満足し得るか。

松を吹く淋しい叫びを、谷川に碎ける水の流を、ドン／＼と響く太鼓の音を、神はどんなに聞くのか。

風が吹き砂塵を捲き、晚鴉が鳴き、夕陽が淡く、夕雲が走り、遠い山や里が淋しく暮る、身延の夕景は嗟峨や御室のその様に見えないだろう、けれども一度打突つた鐵の門扉を開けやうとするSの心眼には深刻に夕景の有様が映じてゐるのだ、焦想しきつたSの胸には強いヒントも烈しいショックも興へられずに湧くものは焦想と煩悶の雲のみだ、小さな反感のみだ。

乾燥した冬の空氣を縫ふて行く梵鐘の響は人生の岐路に立つSには次第に消え行く音の彼方に、大氣を震動させるのに、？を以てあらはす丈けそれ丈け焦想がある。

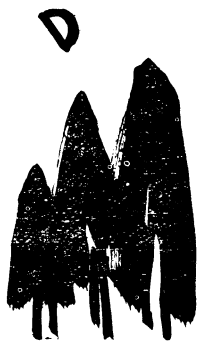
みるまゝに山風あらくしぐるめり都も今は夜さむなるらむ。

せめて身延の山の夕景を之丈に見たかつた。然し己に遅い、時は流るゝ、夜のごばりに消え行く山の夕景に残るものはたゞ焦想、煩悶寂寥のみ。

身を刺すやうな風に肉眼を開いたSは吾と吾が足に蹴つた石塊を凝視した。

あゝこれも顯界か幽界か。

かくて山の夕景は？をのみ残して夜のごばりをとざした。(一、二三日作)



お山の夕景

塞川生

冷い風がお山の隅から隅へと吹きまくつて居る、青々とした杉がお山への登り道の兩側に茂つてゐた、私は今しも此の淋しい夕暮の山道を一人とぼくと登つて行くのであつた、日は早や西山に没しやうとする空は赤より紫に紫は灰色に變つて行くいやに冷たい風が私の頬を撫でる、總てしんみりとしてゐる、祖師堂の前にぬかづいて私は總てを懺悔した、過去におかした罪の數々を……

お山のお引けを告げる五時半の大鐘が灰色した空へをして町へと響くのであつた。

清い身延山にお参りして寂しい何とも云へぬ感に打たれるのであつた、私はお山の静かな夕景に恍惚とし乍らお山の清い空氣を腹の底まで呼吸するのであつた。

夕べのどばりは身延のお山にも下りて來た、すがすがしい氣持になりながら何時の間にか私は中谷を降りてゐた、其處には高い／＼菩提梯が何の虚飾もなく唯無意識に長く高く連つて居た、梯の兩側には大きな杉が繁茂してゐて暗い磴道をなほ暗くして居た、で兩側には残りはずきりせぬ電燈が上まで點々こつつけられて登る人も無かつた。

風が刻一刻と烈しくなつて何だか物凄しい身延の清流は沈黙の中に流れて行く。

お山を降りた私は再びお山を拜んだ數百年の昔聖者日蓮の隠栖したまひし身延のお山!!それも早や暗黒の世界へ吸ひ込まれて行く何處からともなく太鼓の音が餘韻を傳へて響いてくる、身延山でなければ觀られない夕景だ、私は此の強い自然の山水を永く忘れたくない。



予の幼かりし時

S
Y
生

判然と僕の腦裏わがうらに刻んでは居らないが四五歳の頃であつた。紅塵萬丈砂漠のやうな、東京にも春が來て墨堤には七重八重。櫻花は瀾漫として咲き亂れ春の女神の柔しい温い手に天地が抱かれた、時、各校のボートレースが例の如く舉行された浪をうつつ押しよする群集は雲霞の如く兩岸を埋めた各校の名譽を、六尺の身に背負ひ立つた。選手達は、丁度あの風は蕭々易水寒しと歌つた國士、あのやうな重任を負ひ、あのやうな悦びたのしみを幾分顔面にたゞよはしつボートに乗りうつつた。あゝこの時の光景、學友とこの選手との溢るゝばかりの熱誠のコントラス、それは美しい且誠心の何とも言い難い表現であつた。やがてスタートは切られた。幾萬の群集の天地を震はす應援の聲。その驚天動地の光景も僅か一瞬の間であつた。須臾に雌雄決せられ悲喜交々、墨堤を埋め慰められつゝ勝を未來に期し去る敗殘の選手、意氣揚々、歡聲裏に凱旋將軍の如く去る選手。その光景はどんなに僕の心に映じたであらう。勝利の後の敗殘、敗殘の後の勝利、それだけであつた。一寸の悦び、僅かの悲哀、それに對してどうして悦び且悲んで居るのであらう。苦樂、それは輪廻して未來永々に亘るのだ誰が歌つたのか「古來萬事東流、水」と。實際世の中は儘ならぬのだ。井底の蛙の如く、狭い中に沈み騒ぐ人間、世の中は眞に不思議なものだ。春逝き秋來り感じたその事は痛切に誤りならぬを感じた。未來は遠い。されど永久に滅せぬ眞理を幼時につかんだのだ。僕の幼時、それはあの深山の沼、そのやうに何等變化のない平凡なものであつたがこの事だけは未だに利器で彫りつけたやうに残つて年を経る度にひしと胸中を襲ふ。



追憶

覺 林 道 人

むくくど明の山雲

吾が戀ふる故里の空歩ゆみ行くかも

地上が一時に冷くなつた様な晩秋の明方の空をジツト眺めて居た私の病み疲れた頬には時ならぬ玉の露を宿して居た。

六ツの時に父を失つた私は母の手一つで育たなければならなかつた。それだけ私は不幸な兒であつた。

無邪氣盛りであるべき私の幼年時代は俳人一茶のそのやうな淋しいライフであつた。余りに哀はれな境遇であつた、或る時は涙と共に故郷を去つて知らぬ土地に子守奉公を勤めた事もあつた、或る時は村の人々に虐げられたこともあつた、冬の身を千切る様な寒い日に母の手助をしたこともあつた。

私が十一の時兒を愛することの強い母は私の爲めに故郷を捨て、遠い追分に名高い北の國へ移住した。それは自分の子を世間並の子にしたかつた爲であつた。

北の國へ移り住まつた私等親子は矢張り不遇であつた。天は幸福を與へなかつた、けれども私は丈夫で育つた、

然し天は、ア、天は、私等が北の國へ移つて三年目に遂に母を奪つて仕舞つた。ア、母の死、異郷の空、憐れな私はみなしごととなつて、流轉の旅に立ち漂泊の人生を眞劍に味はつたのであつた。

病み疲れた異郷に今、故郷の方に歩ゆみ行く雲をながめて熱い涙の流れるのをどうすることも出来ない。私の幼年時代は全く涙と血の塊りであつた。

かの様に光つて動かない。心にいつばいの悲しさを燃やし、眼にいつばいの涙をためて、人生の底知れぬ淋びしさの結晶がジッと喰ひしばつた沈黙の相貌からポツリ……ポツリ……一滴……三滴と、頬を傳ふては落ちた。

嚴かな夕べ山寺の暮鐘に襲はれて宵闇の薄墨がうつすらと地上をぬり消して行つた。

(一九二一、一〇、初旬)



「傳説を語る漁夫」

覺 林 道 人

暴風雨の後、目茶々々に、叩たかれた港街の水ついた大地も、折裂かれた木々も、虐げられた家屋も、秋陽に光を放つて倦怠の色もなく、反つて若々しい静けさをすまもつてゐた。

港の漁家が波うつて、遙かなる彼方の山は、霞に蹲まる。山根の寺が綠錆に、神祕の光をこめた赤銅の臺が古い過去の歴史を秘めて嚴かなる姿に眠る。

苔生ひた土臺石の周圍から、可也廣い芝生の庭園を押し延べ、芝生から抜け出た老松が全意識を集注して、暴風雨あがりの秋空に、白雲の浮き流れるを黙視してゐる。

屁を驅しつた梁の下に古代的な藝術の巧神が、秋の陽に浮刻られ、海風に朽ちかゝつた素木しんぎに怪しげな陰影を投げてゐる。本堂の室むかはと、重たい障子を開くれば、薄闇らい須彌壇のほこりから微かな金色を放ち、時古りて磨りはげた柱や、天井から底光りのする暗紅色の漆うるしや、金色の箔はくが、處々に光る。

全く神古りた山寺が、濃緑の芝生に、神祕の影を落とし禪三味の瞑黙をおしまもつてゐる姿だ。寺の右手の荒れ茂つた丘は、墓場である。

墓堀りが四人丘から降りて來た。

「随分骸骨が出たな」

「いやにきびの悪い墓だな穴を掘ても泥水でよ、泥水のブジャ／＼する中に人骨が這入つてゐるだもの——俺達も「時」を経て結局はあゝなるだが………實くそれを考へると嫌になるなア」實くよ、體中をのたうつてる血脈が止ればそれツきり土だの水だのになつて斯ふやつてお前さん達と働いたり話したり考へたりする事もなく「俺」と言ふものが「存在」を消すんだからなあ」だから生きてる中、成るだけ樂しめるだけ樂しむとくだ。向ふ三軒兩隣ど、喧嘩ばかりしてゐて、會つても話もしねえでそつぽ向いて通ほる様な窮屈な生活は俺等の社會ぢやしたくねえなあ」實際よ。」

當節の流行語の「愛し合ふ」て悉皆が相互同志仲良く暮らすが一番だよ。人間である以上知らねえものでも、好意を持つのは正當えよ。

それをお前え知つてるものとか、自分や自分の家の爲ばかり良くしてよ、………知らねえ人間は誤魔化してやらうとばかりかゝつてるんだからなあ。俺等也能く解らねえけど、そりやあ喧嘩するこきやあし、悲觀する時きあし、呪ふこきやあ呪ひ、罵詈つくこきや、ついても宜しい、それが正の爲、善の爲、美の爲、人間の爲、佛の爲なら………と坊さまが言はつしやつたが眞實だと思ふよ。全く、人間の「心の根」に「愛」の強いそして寛容い心持を恒に持つての上ならごんなことでもして良いと言はつしやつたが全くさうだんべぢやねえか。」

「そりや、さうだんべい。」

「話しや變るけれど、今度の暴風雨にや、驚れえたちやねえか………十二人も荒波に浸らはれるなんてよ、………俺等が生れて、初めてだえ。」

「實くよ。まだ四人しきや死體が上からねえたあ、實く慘酷だなあ………俺等あまあ生命拾ひをしてよかつたが、死んだものゝ家族は、むごく可愛想だなあ………皆明日の米に困るその日暮して、實く路頭に迷ふなあ。………神佛や天にや一體心があるだんべいか？」

「俺等にや解らねえ……只そんな慘酷い事が無い様にど一心こめて祈らずに居られねえから佛や神はどんなものか解らねえが祈るだ。」

俺が祈る心持ちや、それだけだ。」

泥水だらけの墓穴とみえて彼等の丸出しの、毛の生えた脚や、毛のない脚はどろ／＼泥まみれてゐる。色あせた紺の絆纏も、した／＼か汚れてゐる。泥くちやの鍬や、シヤボルや、鎌やざるの類を各々持つてゐる。

四人は穴堀の器具を、芝生に投げて本堂の「ごはい」の階段を上つて外椽に腰をおろした。

墓穴堀は皆漁夫である。赤銅色に、か／＼やいてゐる顔どいひ、手どいひ、脚どいひ、堅固もたくましい筋肉は、健康そのものゝ様だ。

五十位の「毛むくじやら」の漁夫は言ふ。

「見ねえ！ あの彫刻を——」仰向いて梁を指す。大分古るいなあ——と四十男が相槌を打つ。雲に乗つて、まるい珠を持つてゐる女があるべえ。「お、それから、こつちの家の中で、法を説いてゐる坊さんがあるべえ。」

お、——お經を前に据て、聴衆が座つて聞いてら——。「む、——これがお前、仲々深え因縁があるだて——。「毛むくじやら」は、こゝまで話を引張つて來た。腹を叩きへらし、雁頸にやにの一杯ついた、齒型だらけの鈍豆煙管に煙草を、まるめこめて火を點けた。白い細長い烟は意味ありげに浮刻を、かすめては消えた。

四人は沈黙つてギョロギョロした眼を光らして浮刻を見詰めた。「毛むくじやら」は、暫らく經て鈍豆煙管を、口にくわえたまゝ喋舌つた。

「この山の上に、七面さまが在るべえ」

「お、」「この浮刻の因縁があすこで起つた。」

「おりよりよ！」如何にも意外といふ驚嘆の聲で四十男は答へた。（ありやりやは驚嘆に相槌を兼ねた方

言である。

「あすこはおめえ知つての通り見晴がよかんべい——遙かに彼方を見渡せば、向ふに富士が山々の中から蒼空に、ツーツと立ち——大磯、小磯、鶴沼から西濱へかけて、曲りくねつた海岸よ、——青松よ、——白波よ、——海の真中に烏帽子岩よ、——前はど見れば、緑の江の島よ、棧橋よ、——海水浴場よ、——昔はそんな事あ、あるめえが——左を見れば小動ぎ岬——七里ヶ濱よ、稻村ヶ崎、鎌倉、逗子三浦よ、大島よ、——まるで、雲が霞の中に夢をむすべるが如くてな見晴しだんべえ——何とも言へねえやな。」「さうよ」「毛むくぢやら」

は、ひこかごの文學者氣取りで、得意然と自然描寫を縷述して、三人を振りむいた。三人はうなづいた。

「そこで、お前——六七百年も昔のことよ——時の鎌倉の役人が、龍ノ口で日蓮様の頸切らふとしてもどうしてもきれねえ。」「どうしてよ。」「

「俺が考げえるに、威に恐れたッべい。」「

「おりよりよ。」「

「それから、佐渡に流されて在島四年の後、師匠孝行の日期さまが、赦免狀を持つて日蓮さまを迎に行かれたッ。その歸りによ、日蓮にとつて因縁深かい處だからとあの七面堂で説法を初められたッ。」「

「お、——何日ぐれえよ。」「

「何でも、三日計りだべえ。そしたら江の島の方から一時に、雲が涌き出て來たと思ふとあの高え石段を、コツ／＼のぼつて美しい女がよ。」「

「ありや、ありや。」「

「二人白手拭を覆ぶつて裾をまくり、赤けえ腰巻を出して上つて來たかと思ふと、説法されてる真前にチャンと立派な姿して聞てるだじよ。」「

「おりよりよ、」

「でえぶ、面白さうな話だがまあ一杯やるべい。」

茶飲み茶碗の大きいので、地造の酒を波々ついでのは、口びるの爛れた、アルコール中毒の五十男だ。

「何だい—— 一つしか酒盃がねえのかい。」

「お、」 三人は「毛むくぢやら」がグイッと呑み乾すのを見まもつてゐたが、言ひ合せた様に、兩顎のあたりから液態が、一時にドツと口中に走り出ると喉佛をグイッと動かした。

「年の順だ、おめえ、やんな—— さ、酌すべい。」

「皆さんお先さい—— 有難う。もう一杯だ。」アル中は貧乏なもので、後の二人に氣兼ねて曾釋をした。

「おめえ好きだで—— 先さい、やんな——」お、——でもあまりやると棺桶が擔げねえと大變だ。」

「でも四時の出棺だまだ間があらあな。—— やんねえ——」一つの不格格な茶飲茶碗に、波々つがれて順ぐりに四つの口は、喉佛に動令を發して、すゝりこんだ。呑む度に舌鼓が鳴つた。落込ひだ腹の中では、酒がだん／＼體中に浸徹つて行つた。

「肴はねえのか」豆腐でも貰つてくりや良かつたな。と毛むくぢやら。」

「お、——俺りあ飲みさいすりやえした。」

「お前、全く好きだなあ、」

「あ、大分廻つて來た——ウ井ツ。」

初から黙つて聞いてた三十男が。

「先刻の話はどうした—— 仲々聞いてみりや深かい因縁があるだな。」

「お、—— 飲むので氣を失つてゐた。——それから二日二晩やつてきたが二晩目にや、どうと、看破られて、別に悪意ではなくた、法華經を聞きたいからやつて來ました。釋迦の説は、龍女も、提婆も、乃至草木も、成佛すると言ふだから………と言ふて消えた。」

「一體その正體は何よ、」

「正體か、——何でも江の島の辨財天と言ふ話だ。辨財天が法華の法を聞きたくて仕方がねえ處に、佐渡より歸られた日蓮上人の説法がある、これ幸とばかり、人間に化けられたと、……いふんだ。全く傑れえもんだ、御祖師さまあ、それを初から知つてられたと。——尤も鎌倉八幡を叱り飛ばしたと言ふ人だからな——。

「おりよりよ！」

『それで今江の島の崖洞いはやに「日蓮上人寢姿の石」てのがあつたよ。』

「お、」

「あれは、後世になつて辨財天がその思ひ出に、日蓮上人のせめて姿なりともと、作られたよ。」

「おりよりよ。」

三十男は話の續きを提議してから、おし黙つて聞きながら何か胸中で、判断をめぐらしてゐたか。「そんなこと、あんめい——傳説だんべい。」「何傳説ぢやねえだ——ほんとに在つた事だよ。」「いや——ほんとに、あつたといふ「話」だんべい。」「いや——ほんとに、あつたことだよ。」「解らねえなあ——ほんとに、あつたといふ「傳説」に違げえねえよ。」

「いや傳説うそばなしといやあ、虚話だ——實際あつた。」

浮刻を見ねえ。これが、ほんとに在つたといふ證據だ。「毛むくじやら」は飽迄、下らず若者にまけるのが残念さに自己の説に意地を張る。彼は現實に居ながら過去に立つて現實に實際だと云ふ。三十男は、現在に立つて過去の傳説だといふ。世の學者先生の中でも、往々こんな立場の相異から喧嘩をして生涯相互に睥み合つて死ぬものがある。

過去の事實は現在に生き、亦現實を生かして始めて價值もあり、詮議の必要もある。

實在はやつぱり變移ゆく刻々の現實だ。

「傳説を彫つたのだから、何にもそれが證據にはならねえ。」——岩窟の中の日蓮上人寢姿の石だつて——

あらあ人間が造つただ。」

「ぢや、おめえは傳説としてをきねえな、——おらあ實際あつたと思ふだ。」

「何、(今)から考へて、そんな事があり得ると言ふ程度ならまだしもだが、——おめえは、あまり頑固だよ。そらあ何ば傳説だつて、いくらか其源になる(種)は、あらあね——だがそれを全部本當だと思ふのは、間違えだ。そりや傳説を生んだその頃の人の心が、實際あつた、あ思へねえよ。」——物識り顔に有頂天になつてゐた「毛むくじやら」が物靜かに考へてゐた三十男に鼻先きをへし折られて彼は意地ばつた——この意地が意地惡になつてごつかで仇を討たうと根を持つ。

「おいらあ昔者で、何にも解らねえが——ごふしてもその——」

まあ、宜いやな、二人とも止しねえ——それより一杯飲むべいちやねえか——。「おりよりよ」はさう仲裁した。

彼等三人が傳説だ實際だこやつてゐる間に「山井」と印した一升徳利を先刻から黙つてチビく盗む様に飲つてゐた「アル中」が大方傾けつくしてゐた。

僅か底に溜つたかすの一二盃を「仲治り」に三人は飲むでゐる。「アル中」はグデグデに酔ふて紅火の様な體を本堂の外椽に投げて傾向けに臥てしまつた。

秋の夕陽が、いやまして紅かく墓堀の四人を照射てゐる。(一九二一、一〇、下旬)

民 謠 漁 夫

平 地 幽 嶺

四國島根は海から曉けて

紅い陽がおりや金波が踊る

島か霏かや波路の果は

海は半で陽が消える

「オーイ

東風が強いぞ

七分の帆だぞ

後ギユツとバめ

船綱ゆるめ

右舷に氣を張れ

帆を誤るな

鯉群は右沖だ

波路が光らあ」

七十老爺が弓なり腰を

グツと伸ばせて鹽聲擧げれや

朝の風が胸毛に弄び

うるし塗つたる頬が光る

四國島の根海幸の國

霧が霽れたか島浮き出たか

白い汀にサツと射す朝日

岩に眞珠の玉が飛ぶ

「オーイ

鯉群は近いぞ

帆を巻き下せ

初心な他國者に

笑はれまいぞ

海で生れて

浪間に育つ

俺等ゆづりの

うでより掛ける」

白髪頭にネチ鉢巻を

グツとバめ込みへ先に立ちて

はねる鯉を見卸すまなこ

赤銅作りの身が踊る

四國島根は山から暮れる

磯の小松にサツと吹く嵐

歸り鳥が帆前を飛んで

汀づたいに山に入る

「オーイ

ヤレサ若イ衆

潮流のりちを掛けろ

舟は重いぞ

八舳やちをそろへ

舳こをしばつて

帆足ほあしを擧げた

歸り舟路かきちや

勢掛せかけけろ」

滿みちる潮うしほを蹴うつて行く漁船

ザンブざんぶくと小波こなみがさわぐ

淡あい西日にしひが余光あかりをよせて

サワグ舟ふね舷はたけに玉たまが飛ぶ。

馬子

秋は馳かせ來る四國山かけて

長い稻いねほがユラ／＼ゆれりや

縁えり滴たる青葉あおはがあせる

柿かきが縁えりか紅べにいは松まつか

雜木林ざもくりんに秋あきふかい

雜木林ざもくりんもほごなく盡つきりや

つきた續つきは峠とうげ茶屋

しはの婆おばが煎いじた番茶

そつとさし出す赤前あかまへだれの

ニツと笑わらつたあの娘むすめが可愛かわいい

可愛かわいい／＼で今日けふも來た

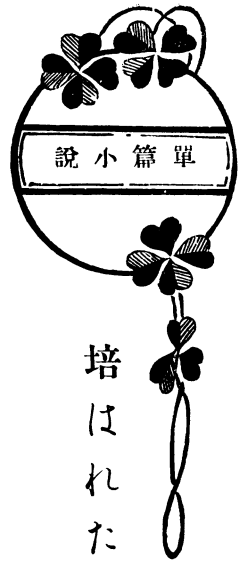
秋は馳かせ吳なる四國山かけて

サツト吹ふく嵐あらしに並木なみきがゆれりや

馬うまの鈴音すずねに舞まひ降ふるもみぢ

雜木林ざもくりんの秋あきふかひ





培はれたる小百合

丸 山 其 撰

汽笛から汽笛まで完全に十二時間てう労働の疲を浴場に洗ひ流して、さらりとした氣分の體を粘の強い夏衣に包んで北を除いた三方が氣持ち好く開放された俱樂部室の強い燭光に照し出された一人の乙女は窓ぎわのベンチの端に斜に腰を下して新刊雜誌のページを余念なしに繰り返してゐる、窓外は澄みきつた遠い廣い中秋の天空のかなたに満月には間もなさそうに思はれるお月様が黄金色の微笑顔を愛宕の山の松の梢から浮び上げて平和の雫を地上一面に投げてゐた、

外出を許された幾群かゝ通り過ぎた頃から御飯場や髪結び場や裁縫室や作法室の静まりとゝもに事務所に次いでひっそりとした俱樂部は折々樓下を傳ふ上草履の音の外は淋しい程の沈黙が漂つてゐた、労働以外の殆んど全部の時間は睡眠と慰安とに費されるのが通例である様に考へられてゐる労働社會殊に婦人の工場では女子の心得べき種々の家庭教師はあるにしても彼等にとつては労働その裡に見出される趣味が殆ど全部を占めてゐた。殊に學科の教師に近寄つて精神の糧を獲ようとするけなげな者はほんこに稀なものであつた、實際餘程の絶倫でない限りその第一目的である報酬は労働能率に正比例する女工としての彼等には勢力も還境も容易に許さない事實に相違なかつた、こうした雰圍氣の中に僅かの時間でも讀書に利用しようとする彼の女は秋と云へば縣外の人々の山梨と云ふ想像を裏切るであらう様な視線の限り黄金の波を打ち反へす此の工場から數里を隔てた或る農家の長女として誕生聲を擧げたのはもう十七年もの過去であつた、然し恐

しい運命の魔の手は可愛盛りいとしまがの三歳にも満たない少女から誰でもが慕ふ様に彼女が慕ふた少女の母を流感てう二字に包んで運び去つてしまつた。

母を奪はれた後の彼の女は此これまで可愛がつて呉れた世間の人々が追々に彼の女から遠ざかつて到底親の光りに浴することは許されなかつた、新らしく迎へられた母親の十何年かの養育を受けた彼の女のエゾロン姿が此工場に始めて見出された頃までは殆ど無意識に單調に花の旦を迎へたり月の夕を送つたりしてゐた、天使の様な無邪氣さで學校の門を潜る頃から読み方や國史のお話しに小さな胸を踊らせては耳を傾けて聽いてゐた彼の女は一番好きなきこと云つたら折々はお友達から借りた少女世界や小學生などに眼を落すこともあつたが何時も總ての注意を奮はれて耽讀するものは家から餘り遠距離ではなくて彼の女の母が寂かに眠つてゐるお寺の所化さんからもらつた日蓮様の血と涙とで綴られてあるお傳説であつた。そして最も興味を感じるこの出來なかつた一つは他家よそのお婆様達から新しいお母様の事柄について問ひ掛けられた時に迷惑相に黙つてゐて話題を轉ずるのを待つ瞬間であつた、まだ幼かつた時の彼の女は水雑巾に恐れて掃除を怠つたこと云つて叱られたり、打たれた音に晝寢の夢を破られたことも決して珍しいことではなかつた、或る秋祭には小使一文持たされずに入幡様のお祭りに行つた、お盆にはお友達の美しい下駄や夏衣はでぎにうつとりと見とれたことも一度や二度では濟まなかつた。

こうした程度まで枯れかゝつた白百合を最も能く培つて美しい姿にし、幽しい重りを放たせたものは彼の女の無二の遊び友達であつたお寺の所化さんに依つて練り返へされてゐる修行と云ふ範疇に入れられた寺院生活であつた。

彼の女のお友達お友達の寺院生活に比較すれば乾燥無味な彼の女の生活ですら餘程の餘裕をはつきりと意識するに充分であつた、假令所化さんの缺點は彼の女にも認められたにしても、二年か三年に一度訪ねて呉れる唯一人の伯母様も徒らに彼の女の未知な亡ない母親を連想させるより外は何の影響をも與へてくれなかつた。

斯した家庭に育つた彼の女には規則正しいが比較的眞の自由が與へられてある工場の共同生活は何とも云

へないのんびりした平和の樂園であつた。一度此の大家族の一員として抱擁されてからの彼の女はほんとに新しい生活を味ふことが出来た。

幼い時から我儘を許されない様に習慣づけられた人々が少しは陰鬱な氣質は免れないにしても總ての人から好きがられる様に彼の女の従順は事務の者からも可愛がられ、多くの新しい友達とも心から温かい深い交りを永く續けて行くことには少しの努力をも要さなかつた。極めて温和ではあるが何處となく強さを持つた彼女を折々氣の毒がらせた事柄は友達の家から贈られた四季とりどりの慰め物の分配に對するお返しとして彼の女の母からは一度も恵れなかつたことであつた、健康で勤勉な彼の女が親たちを喜ばせる稼ぎ高は家族の銘々への土産物は別としても村中の誰よりも優つてゐた、然し歸休中の彼の女の膳には既に尋六にもなつた妹の膳と同じ分量には並べられてゐなかつたのでお友達が無二に期待する休みですら彼の女の心には枯野に荒れ狂ふ野分けの風の様な冷たさが訪れるので或る時は歸休を呪いたい程でもあつた、お友達が折角訪ねて來て呉れた場合などには開業の門出を冷たいお茶漬でしほ／＼と出掛けるよりも一層痛切に情けなささ云ふものに正面に向はざるを得なかつた、温かな母の懷ろに哺まるゝお友達の境遇を模倣しようとする彼の女の標準は許されたる境遇より高すぎるにしても！

薄暗い家庭にしても彼女を休み毎に牽引するそして彼の女に取つて唯一の嬉しい心やりは假令みすばらしい身なりではあるにしても又往々復の度に軽いにもせよ荷物と一緒に缺かさず停車場まで來て呉れて無骨で僅かな言葉でも一言毎に情愛に漲つたそして獎勵と感謝の全部を含蓄させた父親の言葉が誰の父兄にも決して劣らない父らしさに感激させられることであつた。

多くの人が芝居に活動に外出する夜もその中には彼の女の姿だけは見出せなかつた、そして財布と反對に使へば使ふ程増加する智識の泉であり精神の糧になる様にと備へられた俱樂部の雑誌や新聞を透して東西古今の偉人に交つては盡きせぬ興味に浸つてゐた、そして一錢のお金でも稍ともすれば自分の爲に掻き亂されようとする家庭の平和を助長する爲めに役立たせようと努めてゐた。

澄み切つた大空の様に清涼な、月の様に圓滿な心は讀書の中からの獲物であつた、總ての誘惑を打拂ふ銅鐵の様な強く堅い心は嚴格な繼母からの尊い賜であつた、九時を告げる標子木の響きに驚かされて書物が軽く閉されたとき彼の女が唇頭に洩らした微笑は悲しみを喜びに轉換し、苦痛を安樂に開會する御祖師様の御教へに知らずくの間に培はれた小百合の花のみ法の露に潤ひたるほんこに麗しいをとして充たされた喜びの表情であつた。



夢

重 松 ひ さ し

日向りの悪い陰鬱そうな六疊間もその中央に一つの火鉢が置いてある炭火が眞赤に熾熱つてかけてある鐵瓶からは濃々と白い湯気が吐かれてゐる。上段の床の間には聖者日蓮の眞筆の寫しで此の寺の什寶だと思はれてゐる、十界の曼荼羅が懸けてある、それが光線の工合でか、いかにも古めしく、ほん物だと思わせるには充分である。

「正壽お前は佛祖の御恩を知らぬ奴だ、ようもそんな大口が言へるワイ」
こう云ふのは火鉢の前に圍まわの大きな厚綿あつたの座蒲團の上に、キッチンと尻を据へた師尙の稍々怒氣を含んだ銅羅聲である。

「お師尙さま佛様の御恩を深く思へばこそ申すので御座います、お怒りなさいますけれど事實が證明して

ゐるじやありませんか」

こう相應へるのは現在宗門の學林に籍を置いてある弟子の正壽である、どこぞに純な青年らしい血色があつて前途に輝く希望の歡喜微笑があり／＼と眉宇の間に現れてゐるのが見へる。

師尙の語調が平常と異つて、なんとなく荒々しいところから押しても今こゝに師尙と弟子とが一室に對座して、なにをしてゐるか、略々想像するに難くはない、なんとなく、いやに室の空氣が緊縮してゐるやうな氣がする。

「一體お前はそう云ふからには還俗でもする氣なのだらう……………フウン太い事言つて今に現罰が當るワイ……………」

昂奮の感情を無理にも押へ付けて、それが一種の侮蔑に變つたことが領かれる。

「お師尙さま、そんなら、あなたは、殿堂の中に因襲と姑息を把持して心からもない、囁言を云つて信徒を籠絡し、それが佛祖に對する報恩じや」

とお仰言るのですか、こう強く答へ切つた後尾がなんとなく涙に包まれてゐた、たゞでさい逆上し易い青年正壽の心の中には、今言ひ知れない恐怖と返逆の二つがムラ／＼と湧いて、さき程まで、ちやんと膝の上に行儀よく重ねてあつた、兩手が、いつの間にか無意識にシツカリと固く握り締められてゐた。

「云はして置けば、なんどでも吐くのかい、僧侶が葬式や法事をやる事がナゼ悪い」

「高い學費を貢いでワシはお前からそんな理屈を聞かうとは思はぬワイ、この不知恩奴!!」

絶望的な言葉でありながら、而もどこまでも威壓的なアクセント交りのこの語調が今師尙の口から洩れ出たのである、正壽は再び應へる勇氣が出なかつた黙つて下向たまゝ考へこんだ、暫時二人の間には沈黙が續いた、まるで敵同志が合ひ對陣するかのやうに……………。

「オイ」と沈黙を破つた恐ろしい聲が放たれたかと思ふと、

「正壽ナゼ貴様は黙つてゐる、それほごまに現在の、この寺院生活が價値のないものならば——それは

ごまでに僧侶が罪惡なものならば――

お前がそれほごまでに此の生活を、あきたらなく思ふならばお前には、もうワシも思ひを掛けぬから勝手にするがよい」

と投げ出された、その刹那正壽は万鈞の重みを一時に受けた氣がして涙に泌み、と咽ばすには居られな

い。

「ではお師尙さま許して下さい、私は私の欲する道に進みますから」

こう云つて六疊の間を退いて自分の部屋へとかへり、日頃愛讀せる「トルストイの我が宗教」をモスリンの風呂敷に包んで、着のみ着のまゝで寺を出た。今更のやうに、熱い涙が兩頬を濕した、なんだ、あんな惡魔の殿堂因襲の巢窟、教杆の住家、あれに未練が、あつて堪まるかい、ありごあらゆる、こうした言句を思ひ出せるだけ記憶から呼び起して見た、そして行くのだい路歌へ………涙を流すまいと、無理に力強く返逆の焰を燃しては、見るもの、「去らば」と思へば、張りつめた心が歪んで恩義に絡まる熱い涙が女々しと云ふほごまでに瀧の如くに、とめどもなく流れ落ちた。

「正壽く」と、ごこそで呼ぶ聲がする、ハツと思つて涙をふいたとき眠が醒めた。

あゝ今のは夢だのか――夢？ 夢！

それにしてもあまりに、はつきりとした夢だつた、

あたりポカンとして眺めたとき枕頭には、半分讀みなしの「法城を護る人々」が開かれて、十燭の電燈が皎々として一つの嘲笑と何等かの不吉を暗示でもするかの如くに、自分の顔を照してゐた。

――(をばり)――



殘
骸

寬
明
庵

今日も雨昨日も雨さうして日一日と冷く降つてゆく秋雨は銀線の微かに擦れ合ふやうに悲しい顫動を波立たせて周圍を通して染まつてきた。

雨滴の音が絶え間も無い、俺はジーと瞳を凝らす一滴二滴ポトポトと窓に當つてはスーッと硝子を流れる………蝸牛の匍つた跡の様に………

俺は窓越しに野や山の秋雨に濡れてゐるのを眺めてゐる。俺は幽かに息をついた。

見張つてゐた目がポーツと曇る腫が次第に細くなる。頭の中で様々のものが舞踊を始める。

我が長所そんな事を考えるぞ知らず悲しさがこみあげてくる俺にはそんな物がある物かこ何か言ふ。

親切な俺達の先輩は「お前の流れは危いよ、氣を付けなくてはいけないよ」斯ふ云ふて俺達の軀を身動き一つ出来ない程に抱きしめて岸に立つてゐる。

そして俺達が成る可く河に入らないやうにはげしい水の渦や、岩にはねかへる水音を見たり聞いたりしない様にしてゐる、然し俺達は一生この河を游がずに濟むだらうか俺達の周圍には實も葉も枝ももぎつくされた樹の枯幹と火の様に焼爛れた赤地があるばかりだ仙人でない俺達は生きる爲だけに河向ひの森へ木の實をもどめて游がねばならない。

俺の心は俺に言ふ、

「人と云ふ者は何か一つの事に勝れてゐなければならぬ」

無意識に球を轉ばすやうに出たこの一言は實に人間としてのゴールドエッグスの一つである。

これ程尊いものはない。

黄金の卵……所有者は一人の人間である

而かもそれは頭の混亂し切つた俺に放たれた光だ。

平凡な言葉だけれどそれが俺の耳を通つた時丁度神宣の様な尊い力強い嚴肅な氣を以て俺を壓したのであつたその時の俺の心は弱い者だつた丁度障子を圍らせた城壁の様に何處からでも突入られる弱さがあつた。

そして俺の城壁は今の一言に依つてたわいもなく破壊された。大きいと思つた城内の全てのものは大海の一

滴に外ならなかつた。凡てが残骸となつた。

力強い一言と俺の残骸のみが残された……

俺の城壁は自己の力で改築しなければならない。

あゝ俺の精神は自己の力で改築せねばならない。

俺達の周圍は俺達に告げる

「青春時代の初期は人生の最も幸福なる時代」

なるほど俺達は人生の朝ぼらけの中に生きてゐる俺達の前には長い一日がある、しかし長い時があればある

ほど俺達のなすべき仕事は大きいのだ。脳水晶と精力のありたけをしぼり盡してもたりない大きな仕事があ

る俺達はこの世の中を少しでもより良いものにする爲に……自分一個の立場としても……それ等を

太陽の光輝により多く浴せなければならぬ。

むごたらしい現實の悲哀に惱ませられ乍らも尙生きやうと藻掻くのはこの希望をのけものにして他に何があ

るだらうか……

俺達は俺達の個性を信じねばならぬ

俺の個性は只一つの俺の所有である人はその外に何物をも所有してゐない

俺達は自己只一つの個性をより強く信ずる爲に……………より大きく愛する爲に……………則ちより偉大な生

に觸るゝ爲に……………個性をより良く養はねばならぬ。

俺は俺の個性が何んな形であらうとも悲まない。

只より異形……………より強大である事を欲するのだ

スチテルは斯んな事を言ふた。

「神はエゴイストの最大なるものである」

俺達は偉人の何れの點を敬愛するか。

偉人とは個性の最も偏長した者である。

家庭や學校や社會は偉人を稱讚する而かも俺達の個性を削り取らうとしてゐる。

現今の教育とは個性を削減する事だ。

家庭教育とは子供の個性をして親達の平凡性と同一ならしめる事だ。

學校教育とは總ての生徒をして均一に教師もしくは學校の同型に仕立て上げる事だ。

社會教育とは個性をして傳統と習慣の道具にかけて法律の文不軌上にころがすことだ。

修養とは自己の手も足も喰ひ盡くしたタコノやうに赤くなつて人の排出した思想に入りかはる事だ。

自分で自分を殺し切つた人、その人は最も修養のつまれた人である。

よい例證を望む人は軍人を觀察するがよい。

彼等は武器ではあり得る、然し人間ではない。

自他稱して國家の干城と云ふてゐるではないか。
あゝ俺達の個性はかくして失はれ様としてゐる、然し土に依て倒るれば起きるにもやはり土に依らねばなら

ぬ俺達は失はれんとする個性を教育の土臺に依て築き上にやならない。

自己の城壁は自己の力に依りて改築せねばならない。

自己の個性は自己の力で改築せねばならない。

俺は殘骸の上に立ち敵の凱歌に和せなければならなかつた。

「人は何か一つの事に勝れてゐなければならぬ」

それは自己の個性をよりよく發揮する事に依つて生命付けられるものだ。

これが俺が求めんとする凡てである。

新に城壁を圍み俺はその上に高く輝く力強い所の天主閣を築き上げなければならぬ、そして自己と云ふものを明かにしたい。

俺は俺として一番偉い者になりたい。

自己完成は人間として最も氣高い仕事である。

而かも全くの人の進む可き只一つの道だ。

俺達は神である必要はない!!

然し人間として最大のものではあらねばならぬ。

かう考え及んだ時

冷い吾人のブレストは温い血潮の流れるのを感じた。『終り』



聖丘を望みて

高山しのぶ

いにしへ聖父の睦びし丘
そよふく風もなだらかに
尾崎に咲ける山櫻
散れるを見たまふ。聖父の思ひやも、
あはれ氣高く深かりし。
星も移りて月も亦。變り行くなる春と秋
偲ぶに充てるよしかなり
學びのはやし文の窓
我はたのしくひもときし
思出多きわが机
別れてわれは塵の里
過ぎにし、五とせ、
お、沅湘のごと時は流れ逝き
返さんすべもならなくに
願望の巷に低徊し思ひはいと痛まれて
落涙はせきあへず
胸に秘めてたゞ一言
聖父の膝にすがりつき

安からしめよと祈るわれ

編輯の後に

大正十二年は如何に忘れやうとしても忘れぬ事の出來ない深い印象を吾人の腦裏に刻み込んだ年であつた。そして其の印象は永久に吾人の意識中に把住せられ常恒に識闘の上下に浮沈して再生せずには居ない。

五十年以來我國民が熱血を搾り東西文明の粹を集めて建設した華やかな帝都、それが一朝一夕にして往昔の武藏野に歸らうとは吾人の想像だも許さぬ所で有つた、吾人々類に取つて是程の無常是程の凄慘が復とあらうか。昨日迄畫を欺く銀座の街頭に文明の酒を漁りつつ戯れ廻つてゐた人々が、今日は鳥一つだも飛ばぬ廢墟に親子兄弟の白骨を踏みしめながら悲嘆の涙に日を送らねばならぬ身の上となつた、人生に取つて是程の悲痛是程の酸鼻が復と有らうか。薄紙一枚を距てた外、現在の瞬間を隔てた後は全く闇黒の世界として永久に不可知界である淺ましい人間、それが、どうして大自然に對抗し大自然を制服

し得やう。

ハネツサンスの文明は確かに人類の文化生活への源泉で有つた又それと同時に文化生活への魔障で有り自殺者で有つた事を忘れてはならぬ、何となればその純理論的傾向はやがて精神的文化の産物たる宗教や道徳を輕視せんとする勢を示したからである、此の傾向を繼承して一大物質文明を築きあげその潮流は滔々として止まる處を知らなかつた、そして精神的文化は恰もグアジャナの伏流の如く其の影を隠してしまつた、之が現代の文化である。現代に於ける燦然たる物質文明の前には何人も眩惑せざるを得ない、何人も之を稱讚せざるを得ない、然しながら識者は果して是を以て眞の文化であるとするか。

開國以來井中の蛙同様に殆ど泰西の文明から隔絶されてゐた日本國民が一旦その井中を脱して外界に放たれた時、その觀境の廣大な事と外界の種々相とに眩惑させられてしまつた。そしてその瞬間自己自身に對する空虚と侮蔑と彼等に對する羨望と模倣とがその意を占領してしまつた。かくして彼等の畸形的文化の毒牙に依つて我國民 苛まれた。

常に飽魚の肆に在るものはその臭を知らない様に

我國民は此の畸形的文化に對する理性的批判さへも知らなかつた程心酔しきつた。彼を謳歌する聲と此を罵倒する聲とは都鄙の區別なく何所にでも聞く事が出来た。そして吾々の祖先が心血を注いで永き年月の間に築きあげ後昆に残して呉れた國粹は彼等の毒牙の放縱的蠶食に委かす事となつた。開國以來の我特有な世界に誇るべき精神文化は全く其の根底から覆されてしまつた。その結果は黃金萬能主義、物質偏重主義、個人主義、利己主義等が之に代り人々は益々深い迷夢の中に閉された。

世界に歴史有つて以來未だ嘗て經驗した事のない凄慘、悲痛、淒鼻、それは確かに吾人が過去數十年の長き迷夢を覺醒せしむべき大自然の鐵槌で有つたに相違ない。

百數十億の財産と十數萬の同胞とを犠牲にして贏ち得た吾人の貴い經驗は果して何で有つたか、それは物質萬能と云ふ信仰を破つてより以上に尊い精神的文化の存する事、個人主義、利己主義の非を悟つて人類相愛、相互扶助のより貴い事を痛切に體驗した事で有つた莫大な財産と無數同胞との犠牲に對する唯一の報償としては、それは餘りに少な過ぎるか

も知れぬ。然し多大な物質的犠牲を拂つて贏ち得た精神的報償が僅少であればある程それは吾人に取つてより貴重なるものである、此の貴重な報償をば吾人は永久に失つてはならぬ。

將來に於ける希望と光明とに充ち満ちた我國民に依つて叫喚と悲嘆との次の瞬間には復興に對する奮闘と努力とが續けられた、今や復興と云ふ言葉は一つの流行語として普ねく天下に用ひられる様になつた、然しながら所謂復興とは何を意味してゐるか、唯一の報償として贏ち得た尊き精神的文明に對する復興をも意味してゐるか。

眼を驚かす様な摩天樓を仰いで人々はその輪奐の美を歎へ之を稱讚する、然し永久に地中に埋もれて此の高樓を支持してゐる基礎を稱讚するものが幾人有る、基礎工事の存しないものは砂上の樓閣に過ぎぬ。精神的復興を忘れた我が復興は又何時しか前者の轍を踏まねばならぬ、吾人は今それを憂へねばならぬ事を悲しむ。

眞の佛子であり如來使である吾人は放縱と安逸の夢から醒めて立正安國の宗謨に基き勇往邁進此の誤まれる國民の思想善導に従事すべき覺悟を持たねば

ならぬ。棲神の發行は吾人の此の尊き使命を果さんがために必要なる布教或は文書傳導に於ける原稿の練磨であり批判である少くとも年に五六回の發行は望ましい事だが現在の貧弱な本會としてはそれは到底許されぬ。

年に一回の發行それも内容が實に貧弱だ、而も之が閻浮唯一の靈地に在る我宗教學の根本道場、將來我宗の運命更に我國家の運命をも左右すべき青年宗教宗家の集へる學園、それから出する文書の粹を集めたものであると思ふと全く涙ぐましくなる、而もそれが本年大會の決議に依つて數年間その影を潜めねばならぬ悲運に遭遇した、然し是は祖山學院に於ける圖書館設立促進運動の第一歩として本會員の尊き犠牲的義侠心の發露で有つて寧ろ喜ばしい現象である。

本誌の發行に當り教頭富木僧正が特に卷頭言及び祖書感讀隨筆の二文を寄稿下さつた事は深く吾々の光榮とする所である。

發行の遅れた事は吾々怠慢の然らしむる處で有つて幾重にも會員諸君に謝罪せねばならぬ、然し大正十二年度に於ける幹事の改選が幾分遅れた爲め原稿

募集期を逸した事も、又前後通じて五回の募集をしたのにも不拘投稿数の非常に少なかつた事も又確かにその一因である、此は會員諸君の自尊心が深くなつた爲めかも知れぬ、然し吾々は未だ修養の道中に在るのだから、その論説や修辭の完全を期する事は勿論出來ない、唯吾々は現在の吾々としてベストを盡し眞なりと信する處のものを披瀝すればそれで充分なのである、周圍からの批評を恐れて居るやうではその發展は望まれぬ周圍よりの正しき批評それは吾々の大に望む所ではなくてはならぬ、それは寧ろ我々の思想や文章の練磨の砥である。

二三年の後には又此の棲神の復活を見るであらうその時には競つて投稿せられそして此の棲神が内容形式の両面に於て祖山文書の精華として恥かしからぬ迄に發展せん事を祈つて止まぬものである。

(大正十三年六月三十日羽水記)

關西地方修學旅行記

六月三日 晴天 身延出發

白雨一過して蔚蒼たる綠林翠樹は綠愈よ深ふして幽

致清淑涼味掬すべき季に吾祖山の健兒一行五十名は小川猪口兩教授引率の下に修學旅行の途に就く。午後三時一同精神閣前に集合し法味を獻じ道中の無事を祈り教頭猊下の訓示あり殘留生一同に見送られて身延驛に向ふ。午後五時身延驛を發し愈よ車上の人となつた一行は、窓外に展開されて行く自然の美、殊に夕靄にかゝりて雲表に聳ゆる富士山の雄大さと水聲潺々として流るゝ富士川との天然の風景を稱しつゝ程なく富士驛にて東海道線に乗り換へ静岡着、時に午後九時四十分なりき。

六月四日 晴天 伊勢より奈良へ

午前二時十五分静岡を發す、關を破る音響と共に列車は進行する、多くの旅客の中には肱枕にて眠る者、談笑する者千姿萬態なり、朝七時名古屋に着更に參宮線にて山田驛着、驛頭に玄題旗を樹て、我等旅行隊を歓迎せるあり、是れ山田市常明寺の大橋憲孝師及び其の信徒諸士なり、一行は歡迎者一同の案内に依つて常明寺に入る、當寺は聖祖嘗て伊勢大廟に三大誓願を奏言し給ひし靈蹟なり、寶物等を拜觀し尙晝食の饗應を受け正午大橋師の同道にて外宮に向ふ。外宮に詣ずる幾多の人々は何れも神境の靜寂な

るに襟を正さざる者はない、一行は神前に進み額く
事暫時。此れより内宮參道に進む、六丁にして替願
井戸と云ふあり聖祖大願を以て大廟に詣せられし時
一、百日間苦修鍊行し給ひし靈蹟にして當時の井戸今
尙現存せり、近く此の井戸の上にそが記念塔を建設
する由を聞く、吾等は此の靈蹟を拜して漫ろに六百
七十有餘年の昔を回顧し感懐無量たらざるを得な
い。更らに進みて宇治橋に至る、橋は流れも清き五
十鈴川に架せられたり、橋の中央に佇めば四隣寂と
して聲なく靈氣肅然として充つ、一行は五十鈴川の
流れに口を嗽ぎ手を洗ひ敬虔の誠を持って御苑に入
り、正面の石段を上りて神前に詣で法味を捧げ皇運
國威の隆盛を祈る已つて神殿を拜せば總べて白き丸
木桂にて建築せられ奥の本殿の棟に處々金の金具の
光るは一層壯嚴な感じを與える、我等は御苑を拜觀
し自ずと西行法師の

何事のお在ますかわ知らねども

かたじけなさに涙こぼるる

の句と本化聖祖の廟參の時を思ひ浮べ思慕の情に堪
えず、等しく靈感に觸れざるなく黙々として語なし、
辭して二見ヶ浦に赴く。二見ヶ浦の海邊は白沙青松

碧波と映帶して景色稱するに勝へたり、殊に奇なる
大小兩岩に七五三繩の長く張りたる形こそ何物にも
渝へられぬ麗しき眺めなりき。一行は海岸に憩ふ事
暫時にして二見ヶ浦驛に至る此處に於て同道を得た
大橋師に一同感謝の意を表し別れて吾一行は再び汽
車中の人となり、午後九時奈良驛に着、月の家族館
に投宿す。

六月五日 曇 南都見學

早朝夢を破られて目を明くればホテルの窓外に南都
の風致初めて開展さる。朝食後一行はホテルを出で
昔も變りなき三條通りを歩みつ興福寺境内に至る、
興福寺は法相宗の大本山にして千二百年前奈良の都
と共に創立せられたるものにして今は五重塔三重塔
東金堂花の松南圓堂等の殘存して昔日の盛時を偲ば
しむ。惟ふに南都に於ては古代佛教界の權威たる南
都六宗の寺院は現在も尙は興福寺東大寺西大寺藥師
寺唐招提寺等何れも雄大なる堂宇を存す。雖も此等
の全部は全く信仰的方面より見れば唯哀れにも殘骸
を留むるのみ、我等は此等の堂塔を見て奈良佛教の
全盛時代を想像し更らに死せる奈良佛教を現觀して
轉た今昔の感に堪へざるものありき。興福寺五重塔

の右より優美なる石梯六十一段を下れば猿澤の池あり是れより春日神社に通ずる兩面の廣々たる芝生は奈良公園なり鹿多く或は樹の蔭或は池の邊に散在して人を迎ふ。春日神社の境内には無數の燈籠左右に並列す、一行は社前に法味を捧げて神社の南門より二月堂三月堂手向山八幡等を巡拜して三笠山の麓に出づ、若草山は名の如く山全體若草を以て覆はれ山上の眺望も亦良し、麓に暫く憩ひ東大寺の大佛殿に詣り一同巨大なる盧舎那佛の像を拜觀し更に博物館に入り古代の佛像佛塔佛畫を拜觀して奈良朝時代の藝術の發達を偲ぶ。其の他諸官社等を見學して、最後に日蓮聖人寄寓の靈場蓮長寺に聖祖修學の當時を偲び奉り午後一時法隆寺に參詣し、聖德太子の佛教興隆に努めさせ給ひし事蹟を追憶し、且つ古建築の佛塔及び金堂上御堂夢殿其の他寶物の數々を見學し聖德太子及び其の周圍の人々の信仰の大體を知る事を得しは殊に吾等宗教家としては一層意義ある事に思はれき、法隆寺を出で汽車にて京都桃山驛に至る。桃山は昔秀吉以來史實に富める處畏くも明治天皇此の地の景勝を愛せられし結果、此所に英靈を鎮め奉りしなり、大帝の御陵墓は舊桃山城本丸址に昭憲皇

太后の御陵は名古屋丸の址に在せり下りて亦乃木神社有り御跡慕ひて我は行くなりと遺詠して自刃せる將軍の靈は永久に御陵近く奉仕するを得て満足ならん。兩御陵及び乃木神社に詣でたる我等は明治聖代の恩徳と乃木將軍の無二の忠節を心に思ひ浮べつゝ、再び汽車にて京都驛に至る、先づ法華俱樂部に旅裝をどき一息つきしは午後六時なりき。

六月六日 曇 京都市内見學

京都は紀元一四五四年の延暦十三年桓武帝の都し給ひてより明治初年迄一千餘年間皇居の地にして今日尙ほ御即位の大儀は京都に於て行わせらる、亦平安時代よりの佛教文學、美術等今に至つて尙ほ且つ昔の面影を残せるもの少なからず。殊に本宗に關しては永仁二年日像菩薩帝都開教の發端、及び日靜上人鎌倉名越より今の太光山本國寺を京都に移轉せらるる等を始めとして妙法の西漸は遂に今日見るが如き盛大を呈するに至れり。先づ本國寺に參詣す、當寺は前述の如く日靜上人鎌倉より移されたる寺にして有名なる三箇の重寶の隨一宗祖隨身佛立像の釋尊を奉安せり、其他太光山の靈寶等全部拜觀する事を得且つ亦當本山及び光山學院生諸君は吾等祖山旅行隊を

歓迎し當日特に歓迎茶話を催し長尾僧正より親しく歓迎の辭を戴きしは感謝に堪へず、一行は本國寺より明德女學校を見學更らに二條離宮に赴き維新の大政奉還の時を追想しつゝ西陣に至り、管公を祀れる北野天満宮及び足利義滿が豪華を極めし燕居の地たりし金閣寺に至る然して三層の樓閣其の他當時の粹を極めたる美術的寶物等を見學し道を北にとりて四海唱導妙顯寺に着く、當寺は後醍醐帝の勅願所にして日像上人の開基本宗洛北發軔の道場たり當山の靈寶玄旨本尊宗號の繪旨等を拜觀し日像上人の三黜三赦の弘通を偲ぶ、特に當山主の厚意により龍華文庫を見學し已つて、村雲瑞龍寺門跡に詣ず、當御所は後陽成帝の勅願所にして豊公の姉日秀尼の開創たり。次に東山方面に向ひ先づ御苑に入る御苑の中央に御所あり是れぞ桓武帝以來永年皇居たりし所にして明治初年車駕東遷せられ御所を別宮とせられたれど古姿大號を舊時のまゝに存せらる尙ほ東して西身延祖山歴代圓教日意上人開基なる本山妙傳寺に參詣し、それより少しく歩みて岡崎公園に至れば平安時代を偲ぶ平安神宮在り、平安奠都千百年祭に際し新に桓武帝の神靈を奉祀せらる、其の祠前に碧瓦丹塗

壯麗なる建物の並べるあり、之れを大極殿と云ふ、其の他武徳殿インクライン及び今上帝の御即位式の記念物たる公會堂等を見學し遙かに南禪寺の三門を望みつ應天門より眞直ぐに道をとれば淨土宗鎮西派の總本山智恩院に至る、境内宏大にして堂塔觀るべきものあり、尙ほ右すれば泉石の美を極めたる圓山公園に出づ更らに進みて東大谷高臺寺等を経て八坂五重塔を見清水寺に向ふ、清水寺は大同年間坂上田村麿の創建にかゝる名刹にして規模宏壯を極め就中南面の舞臺は古來頗る名高く其の下に音羽の瀧あり、瀧より裏山の密林を辿りて本國寺の茶毘所たる東山法華寺に參詣當寺は日靜上人の開基なり、一行は任職の歡待に依り暫時休息し三十三間堂博物館等を経て真大本山東本願寺及び西本願寺に至る何れも堂塔伽藍頗る雄大に且つ亦詣ずる者甚だ多し、一行は何れも彼れ等宗派の迷へる信仰が如何程迄人心の奥底に食ひ入れるかを想像して又心慳に堪へざるものあり。斯くて本日の見學も終へて午後六時俱樂部に歸着

六月七日 晴 比叡山及び近江見學
早朝俱樂部を出發し市内三條大橋より京津電車にて

大津に入り更らに鐵道にて叡山驛に至る、叡山町より延曆寺本坊の境内を過ぎ比叡山登り口に向ふ道は廣く兩側に芝草生ひ茂り樹木並び樹ち、處々に石燈籠の配置せる趣き先づ装蔽の氣あり、登り口より二十五丁の坂道あり、漂々たる琵琶湖の青空に連るを顧視しつゝ、坂路を辿る、坂は急にして折々秀峯峻嶺の間に古松老杉鬱鬱青々として清涼の氣一山に滿ち亦見るべきあり、一行は漸く根本中堂に登り着く山上の茶店に休息し根本中堂の内陣を拜す、幸に延曆寺の僧より比叡山につきての説明を得たり、當山は天台宗總本山にして桓武帝の勅願に依り傳教大師の開創にして延曆四年大師始めて此の山に登り一乘止觀院を建立し自ら一切三禮の藥師如來の尊像を彫み之を安置す、以後弘仁十四年勅額を賜り延曆寺と名けられたり。亦比叡山は各宗の名僧等の遊學せられたる地なれば佛敎界に最も深き關係を有せり。中堂より大講堂に進み一行講堂を見學する時漫ろに過去幾百年以前聖祖曾て遊學せられたる當時を偲ぶ。中堂講堂何れも宏壯を極めしものなり。講堂より戒壇院及び傳敎大師廟なる淨土院其他法華堂釋迦堂相輪塔等中塔西塔の大體を見學し山路を横川にこれば

再び湖水現れ山容水色雲形樹影一として奇ならざるなく妙ならざるはなし、一行は疲勞も覺えず横川中堂元三大師堂を過ぎて日蓮上人修學の靈地定光院に到着せり、此所は極めて孤邃の地なり、一同聖祖の墓前に踰づき讀經唱題聖人の修學當時を追憶して涙と共に側の草を掃ひ花を捧げて後古より絶えず濁なき靈水に喉を潤し周圍の靈氣に觸れて各々名殘を惜みつ山を下り途中有名なる惠心院を經へ再び比叡山町に出で傳敎大師誕生の地たる生源寺に詣で坂本に至る一行は湖上を巡らんと蒸汽船に乗じ湖上を走る、甲板に立ちて琵琶湖上を望めば渺瀰として碧空に連る、時しも大風吹き來り大波洶々として恰も海の如し、船は唐崎の松を横に見て勢多橋を過ぎし時突如大雨降り來り石山に着きし時は一層激しく降りしき一同あはたしく船を捨て辛じて石山寺に至る、石山は名の如く大なる自然石を以て體となしその形甚だ奇なり、段を上れば紫式部の源氏物語を草せる跡あり亦左に觀月亭在り雨降る中にも遙かに湖を望む其の自然の美實に晴天よりも一層趣きを添へたり。石山を去りて電車にて京都に歸る俱樂部に着きしは午後七時なりき

六月八日 晴天 京都出發

去る六日の市内見學は天候の都合上市内全部を見學する事不可能なりし爲め本日午前七時より午後八時まで自由行動を取つて各自希望の處に行きて京都の氣分を味ふ。午後八時全部集合人員を點呼し同十一時一同旅装を整へ俱樂部を辭して京都驛に赴き午後十二時の列車にて光山學院學生諸君に見送られ、去り難き西の都を後に出發す、而して明れば六月九日午後四時身延に着、殘留生諸君に迎へられて共に校歌を奏しつゝ無事歸山す。一行は三門前に於て佛祖三寶に見學旅行隊の無事終了を奉告し萬歳を三唱して解散せり。

最後に謹んで今回修學旅行中歡待を辱ふせる各寺院及び信徒諸氏に對し謝意を表して擱筆す。

(以上吉川記)



會報

【庶務より】

茲二三年は可成り山を擧げての祝典が重つた、聖誕七百年、世界平和紀念法要、立止大師號宣下書奉戴式、其都度満山の大衆と相交つて甲斐々々しく立働いた吾學園師徒の努力は、山の歴史と俱に蓋し忘る能はざる事の一つであらう。其處に道徳の淳厚さと、祖山愛の惻湧きとが窺はれて床しい。山乍らの文化を開いて底の底迄を敲いて進展上の雄者たらんとする 聖子の睦みは何時其の望まる、世へ眞に振舞ふ事が許されるか知らし！ ドウセ争ひは人生總ての父であり、不満は若き人々の捨て難い情の一面の力だ。大正十二年……其れは開祖御入山六百五十年の奉祝會の秋であつた。一年の経緯から繰出さるゝ本會の精果は如何に纏られしか、別に詳細に亘る事は年内逐次身延教報誌上に擧げた事故、又紙數の許さない所でもあれば茲には大要の事件を記して以つて一般への感謝と、希望とに及ぼう。

昨年度の會報に次で

十一月十日……前身延教報記者黒澤松雨氏の編輯「立正」の創刊に際し寸志を表して祝す

一月五日……本院生親睦福引會執行太田文學部幹事此に當る

一月十五日……明章改正の件申五以上集合して協議確定、同學會準備委員として 結城瑞光君江原亮勇君渡邊泰深君松田文逸君等を推選す。

二月十六日……宗祖降誕會例年に比し異りし事なし夜間學生劇稍

々近年に無き盛を見る。

三月十九日……卒業生送別茶話會並ニ高木教師(友章)の送別會を開く、岡幹事開會の辭に次ぎ高山君中等部代表深澤君高等部代表の祝辭あり代りて高等部結城瑞光君中等部富田海音君の答辭あり副會長訓辭教學部長告辭に次いで高木教師の送別に移る學生代表江原亮勇君の送別演説、高木教師の答辭ありて閉會の辭太田幹事負ふ

三月二十三日……學院長法主小泉大僧正御遷化

御法號……本信院日慈上人

三月二十五日……雜誌『樓神』製本完了有志關係者に對し三百部發送す

四月十五日……教授伊丹靈瑞師退職御退山に就き紀念品贈呈

四月二十三日……故日慈上人御本葬、學院師徒は總べて本院委員の命により服務す

四月二十八日……建宗會、兼て松木本興、中島清春兩師新任教授の歡迎茶話會を行ふ

五月三日……宗祖御入山六百五十年紀念事業として一大宣傳をなすべく假布教場に祖傳模塑裝飾をなす期間内各場毎に學生説明者を配置しエハカキ販賣布教等に當らしむ

五月十五日……道路大學宣傳を初め岡幹事全任を負ひ宣傳箋二萬枚を印刷して配布す

六月二十六日……定期大會……午前八時より

近年に無き緊張味を見る 中等部より提出の『中等部改造の件』あり端なくも中高對立となり騷擾を呼び午後四時終ひに留會に至る 同二十六日續會を開き協定す 購賣部細則制定(深澤君提出)可決、

●●●●●
幹事改選左の如し

中等部

高山 惠 忍君 二七票 (辭任)

神田 義 法君 二五票

松村 文 光君 一六票 (當選者)

立谷 長 康君 一二票

高等部

野崎 學 穩君 二五票 (當選者)

江原 亮 勇君(再) 二三票

渡邊 泰 深君 一八票

安藤 恭 善君 一七票

六月二十七日……幹事任命

辯論部 江原 亮 勇君

運動部 野崎 學 穩君

文學部 松村 文 光君

會計 神田 義 法君

七月一日……本學院生佐藤海澄君亡母の追善の爲め埋木細工文鎮百十三個寄贈す

八月三日……市川新法主御入山式

九月十二日……震災救濟義捐金として金額二百圓身延村長を経て

本縣廳へ提出の手續をなす

九月十三日……前幹事四名に對し謝禮として頭書の冊子を贈呈す

「日本國体の研究」 岡 観 修君

「印度哲學宗教史」 太田 純 志君

同 下田 光 泉君

同

立谷長康君

九月二十三日……震災各地關係者に對し見舞狀三百通發送す

十月三十一日……中等部一年級より今回聖墓會設立の事、書類取纏

め右級長より届出あり直に副會長へ申告す

十二月十八日……入營者松永良詮(中一)に對して囑として書籍一

贈呈す

二月十六日……(十三年)宗祖降誕會

本年は例年の晝間裝飾を全廢し十三、十四、二日間地方布教に赴

き十六日夜間は學生宣傳劇を開く、本年は總べて委員組織に變へ

準備實行決算に關して委員參與し幹事此を處理す晝間布教部は別

に辯論部報に擧ぐ夜間演藝左の如し

順 序

一、小供會宗歌 午後六時十分

一、開會宣言 江原幹事

舊劇 二幕

一、大正壺坂 二幕

喜劇 二幕

一、觀音の眼 二幕

時代悲劇 二幕

一、變スレバコソ 櫻 狩

印度聖劇 三幕

一、聖者の後半生 三幕

作者 鈴木教授

一、西洋大奇術 四幕

大喜劇 四幕

一、娘の鯉 四幕

一、電氣應用 降誕の曉

一、天人舞 降誕の曉

一、閉會の辭 江原幹事

以上 午後十二時半閉幕。

顧みるに過去一ヶ年の消長は星々繰返さるる行事には過ぎないが確かに學徒の氣勢は進展の間に日夜昂まつて來て居る。院長市法主を會長に、教頭富木鏡廣師を副會長に、小川教授、辯論部長、中條教授文學部長、松木教授運動部長に各師の英裁に依つて幹事其の實務に酬ひて、一般學生の襟度ある充實心に唆かされて聊か會の面目と方針とを廣めて行く事は何と云つても喜ばしい、聖團の睦みが自ら躍如として山の隅々に輝き初めて居ればなるまい。未だ疲せざる生命者の對時だもの何で精華を實らさぬわけには行かう。

辯論部報

從來の講演部を本年度の定期大會に於て辯論部と改名するに至つたのは。潑刺たる氣概の所有者たる一百余の祖山生が自然に對して其の辯舌を練つて居る歴史は決して單時ではない。四季交々或ひは岩壁に登り、高丘に至り、綠樹密林を友として獅々吼の日を續けて居た事の積重!! 是がドウシテも講演の境から立脚を變へて辯論の希望に面した所以でもあつたらう。一般社會の辯舌に較べてもだが殊に宗教家の動く所として此の辯論の必要を感じない事はない。雄辯は人格の聲であり、人生における最も高い證明であり、人間生活の最大代表であると云ふ。而かも新文化建設に倦きを知らない、怠忙場裡の民衆を最も能く擔ひ得るものは是亦偉大なる雄辯である。近代の祖山雄辯史!! 其れは矢張り此の學園の裡に其の豊醇な材料

を取らねばなるまい。十二年度に於ける此に屬する部報を今二種に分つて大要を見やう。

即ち一は遠征的方面及び地方布教と二は山内説教及び學院定期雄辯會である遠征的方面としては

五月十六日……東京大崎日蓮宗中學主催中學生雄辯大會に本會より中五高山惠忍君を派遣す君は演題『鼓翼を越へて』の下に雄辯を振ひ好評を博す附添人として岡幹事同行。

二月四日(十三年)……同大崎大學主催全國大學雄辯大會へ本會より高二幹事江原勇君を派遣出席せしめたる所……大崎大學講堂

時……二月四日正午より

演題……流底を敲いて

因みに大學雄辯會へ參加した事は學園雄辯史あつて以來最初の試みにして幸ひ在京同志會員諸彦の應援によつて相當な責を果す事が出来た。

四月三日——四日……依頼に應じて高三岡觀修君、高一下田光泉君の二氏を切石及び附近の小學校等に於いて公開布教をなした。

四月六日……本郡飯富村本成寺の依頼に應じ岡觀修君出張布教をなす。

二月十三、十四日(十三年)……宗祖降誕會に當つて本年は改新して二日間地方布教をなした。

布教地等は左の如し

第一班……切石、飯富、下山方面

布教員……岡觀修君、下田光泉君、花島寛瑞君

第二班……南部、成島方面

布教員……戸田周妙君、富田海音君、高山惠忍君

第三班……内船、萬澤方面

布教員……福島瑞岳君、秦觀行君

右布教に於いて各班共通材の關係も勿論あらうが又一方各地の寺主、信徒諸氏の絶大の援護に俟つて意外の効果を認め注益甚大であつたらしい。

第二の山内説教及び定期雄辯會の情報を擧ぐれば。因みに山内説教は毎年度初め幹事其表を製して順番に試みてゐる關係も多數に及んで居るので是亦煩に流る、故除かう。其中、二月十六日(十二年)の山内大擧傳道のみは其の學生一般の努力の最も多とする處があつたから茲に記さう。

布教期間 五月十五日より六月十二日に至る約一ヶ月間岡幹事總

ての責を負ふ。

傳道番組

A. 組……福島君、田中君、原君、森島君

B. 組……戸田君、花島君、小野君、吉川君

C. 組……江原君、松尾君、池上君、秦君

D. 組……竹内君、高山君、山口君、堀内君

E. 組……太田君、中條君、高崎君、渡邊正君

F. 組……野崎君、富田君、立谷君、今村君

G. 組……深澤君、間宮君、池田君、風間君

H. 組……岡君、渡邊泰君、望月君、鍋谷君

晝間奉仕の疲れも慰めて、高張りを先頭に校旗を幹事護り、辯士此に聲援を加へ校歌を誦ひ乍ら三門から平田屋前の布教陣地に進み行く夜の若僧の傳道の姿を見た度に、思はず戶外に飛び出て囑

承るのであつた。斯ふした若き學僧の教化の手によつて靈山覺めなば……の希望を隠しなく標示して行く憶出は何時の何時迄、驚峰自他の耳朶を鳴らしてくれる大ききであらう。

定期雄辯大會……

十一月七日……第二學期選出雄辯大會本日午後一時より開會、

遠藤、鈴木、小川、松木、猪口諸教授臨席、午後四時閉會。

プロگرامム

開會の辭

私の伴侶に

大地に足づけ

學びの雄

青春の目醒め

法華經の哲學的發揮と精進の一路

哲理の人生より

餘の夢の間に

講評

開會の辭

二月二十三日……第三學期選出雄辯大會

プロگرامム

開會の辭

生命の祭壇に額きて

流れに直而して

永遠なる青年の意氣を愛せよ

跪きより力へ

野崎 幹事

中一 野崎 政信君

中二 田代 寛秀君

中三 森島 見薩君

中四 池田 壽良君

中五 池上 堯光君

高一 鈴木 正光君

高二 福島 瑞岳君

高三 太田 純志君

小川 辯論部長

江原 幹事

松村 幹事

中一 近藤 惠聰君

中二 平地 樞明君

中三 増永 大謙君

中四 今村 惠眈君

願望の巷に立ちて

心霊の苦悶

大學雄辯會報告

日蓮上人の人生觀

講評

開會の辭

以上

中五 高山 惠忍君

高一 佐野 玄榮君

高二 江原 亮勇君

高三 岡 觀修君

小川 辯論部長

野崎 幹事

靜寂な靈山法關に而かも斯ふした若人の群が此の地に眞に芽生へて、生命線上に雄辯の苑を趁ひ見て、自由と、豊醇と、實虔と、犠牲とに満たされた人格と成り變つて雄舞の世の壇上に其の永年月の積疊を語る時嘯かし、吾に訓へた聖がドンナにか喜してくれるダロウ、大空の風にも似て何等の妨害なき此の試練の自然と恵みの時間とを誰が一番活用して此の美風者たる月桂を冠むるの士は誰ダロウ。

一九二四、……二、(白線記)

文學部報

物質文明文化で築き上られし華の都も昨年九月一日突如として襲ひ來つた震災の爲め、果敢ない運命に依つて破壊されてしまつた。人間の手で造つたものにどんなにしたつて不滅の生命を賦與する事が出來様筈はない。

して見れば物質文明の賜物も大自然の前にはなんの威力だにもないではないか

今まで宗教といふものに何等理解なき社會の人々は此の災あつて以來宗教の偉大なことに目醒め宗教崇拜の觀念が増してきた。

此の好期に當り熱の冷めざる内こそ宗教家の最も奮起すべき時である。虚偽多き社會に憐み苦しんでゐる總ての人々を救はんとする重大な責任ある事を忘れてはならない。苦惱多き社會の眞只中に立つて己れの本分の爲に戦へオ、その熱!! その健闘、それは第二の文化即精神文明の建設である、只それは血燃え肉躍る吾々宗教家に於てのみ築き上られるのである。

茲に吾同窓會文學部の棲神は布教傳導の一として毎年一回發行となつて居るのであるが、長い間吾々共の宿望なりし圖書館の設立が本年の大會に於て決議され、その設立費に充つるべく向ふ數年間棲神を中止する事になつた。

次に本誌の發行が慮外遅れた事は誠に止むを得ざる事情ありてとは云へ自責の念に堪えない。

今まで雑誌縦覽所に備へ付けし雜誌中やはり圖書館設立費に充つべく寄贈雜誌を除く外全部撤廢する事と決議された最後に本會へ書籍雜誌を御贈與下されし諸氏に對し深く感謝の意を表する次第である。

今、雑誌寄贈者の芳名を示さば

- 大崎學報(東京立正大學) 天業民報(天業民報社)
日宗新聞(東京日宗社) 身延教報(身延教報社)
立正(高杉立正社) 覺醒(大阪覺醒團)
雄辯、現代、改造、中央公論、婦人公論(東京望月軍四郎氏)
唯一(大阪覺醒團) 傳導(大阪傳導社)
三寶(東京森江書店) 宣明庵(日蓮妙龍會)
閉の光(京城附教社) 信友月報(名古屋信友會)
あさひ(大阪あさひ社) 立正教報(神戸立正社)

國際畫報(東京、高橋榮教君、森田一擁君、結城瑞光君)
以上 (松村生)

運動部報

運動!! 此の言葉はなんとなく力強い感を与える、春の若葉萌立つ様な青春の意氣が窺われる。世の向上發展と共に運動は世界的に旺盛になつて來た而も近時運動熱の旺んな國程先進國なる事は事實で運動が眞に理解されて來た事であると思ふ。或る人は云ふ「三寸の舌頭良く大政を左右す」亦或る人は云ふ「住して目を千里の外に走らす」大いに然り、文辯能く人心を指配し國の危急存亡を救ふ而し文辯亦肉体を離れては存せず、故に其人の功績の大小は總べて身体の健全に依る事は言を要しない、今や國事多端の時「健全な精神は健全なる身体に宿る」千古不磨の金言は益々其の光輝を新に出來たのである。此處に於てか眞の寢光土世界の靈山たる靜かな祖山に學ぶ我等も唯本化前頭の大法を學ぶと云ふ事のみを以て足れりとして居られない、渦巻く社會の人心を觀ては今更に現在將來の多事を思ひて身体の鍛錬に志さずには居らない、昨秋震災の影響で我部設備の完全は期して得ざりしも斯ふした眞の意味の運動に志す人の逐次になつて來た事は眞に喜ばしき事である。

○庭球部の如きは全生徒の半數を占め日曜日の如きは二三十人のユニホーアの妻が入り交りて奮闘する様は此れが伽藍佛教の奥殿に住む人の様には思へない技術の如きも日々上達して春秋二度の試合などには物凄いシーンを見せてゐる。

□弓術部も追々に旺んになつてきて目錄以上の人が三人も居る。

我國特有のものだけに靜かに悠々と一種異様な緊張振を見せて引絞つた姿靜寂を破る命中の音流石に昔を偲ぼせる觀に部員の誇りとする所である。

最後に會員諸君「永世の闇を照すてう燈臺守は誰なるぞ」と歌ひ叫ぶ諸君よ。眞の意味に於ける運動をして益々發達せしめ以て心身共に壯健を期し此の校歌をして意義あらしめん事を望んで止まぬのである。(靈峰生)



會計報

金品寄贈者芳名

(自大正十二年十一月
至大正十二年十二月)

- 一金五圓也
- 一金拾圓也
- 一金拾圓也
- 一金貳圓也
- 一金貳圓也
- 一金參圓也
- 一金參圓也
- 一金參圓也
- 一金拾圓也
- 一金參圓也
- 一金貳圓也
- 一金貳圓也
- 一金壹圓也
- 一金貳圓也
- 一金五圓也

本院內	太田日	定殿	一金拾圓也
東京市	鏑木繁	子殿	
靜岡縣	手塚忠	吉殿	
東京市	松澤快	哲殿	
靜岡縣	山口惠	澄殿	
同	長田義	正殿	
山梨縣	井手貞	存殿	
東京市	相澤和	助殿	
學院內	松木本	興殿	
同	中島晴	春殿	
同	北陸學友會	殿	
山梨縣	妙淨	寺殿	
千葉縣	中村瑞	義殿	
學院內	通學生一	同殿	
同	猪口海	靜殿	

以

上

橫濱市 オルセ ン殿

大正十三年十月一日印刷
大正十三年十月三日發行

編輯人 山梨縣身延村 中條是明

發行人 山梨縣身延村 松村文光

印刷人 靜岡市吳服町二丁目三十四番地 野崎重兵衛

印刷所 靜岡市兩替町二丁目一番地 池鶴堂印刷所

山梨縣南巨摩郡身延山久遠寺

發行所

祖山學院同窓會文學部